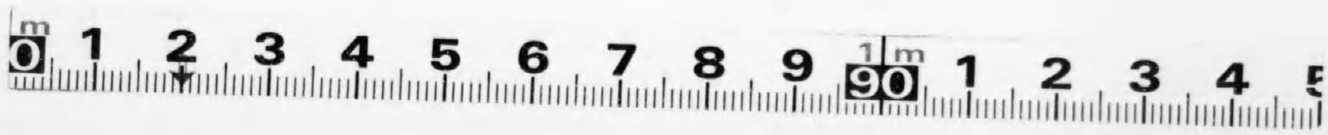
裝


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4

30

法學博士　河津　暹　君　講述

銀行叢書
第參編

物價問題ヨ就テ

全

東京銀行集會所

法學博士　河津　暹　君　講述

銀行叢書
第參編

物價問題ニ就テ

大正
14.金30
內交

東京銀行集會所

508-30

例言

本書は昨年六月當所に於て開催せる經濟文庫圖書閲覧會第三回講演會に於て河津博士の講述せられたるものゝ速記にして更に博士の校訂を受けたるものなり、從ひて書中に「本年」若しくは「昨年」等とあるは博士が講演の當時卽ち大正十三年六月より見たる年月なりとす。

大正十四年三月

東京銀行集會所

物價問題に就て

目次

緒言……二
第一章　物價問題と經濟社會……二
第一節　物價問題は經濟問題の中心なり……二
第二節　歐羅巴戰爭と物價問題……四
第三節　物價問題の經濟社會に與ふる影響……一六
一　企業家及勞働者に與ふる影響……一六
二　外國貿易に與ふる影響……二〇
三　財政上に與ふる影響……二五
第四節　物價の調節……二六
一　物價調節に關する反對論……二六
二　物價調節の必要……三三

第二章　貨物を中心としたる物價問題……三六
第一節　物價調節の目的物は生活必需品なり……三六
第二節　物價調節の方法……三八
一　價格のみを調節する方法……三九
(一)　暴利取締……四二
イ　暴利取締の目的……四二
ロ　暴利取締の二方法……四四
(イ)　我國に行はれたる暴利取締令……四四
(ロ)　英國に行はれたる暴利取締法……四八
(二)　最高價格制度……五三
イ　最高價格制度の目的と方法……五三
ロ　最高價格制度の實行さるべき時機……五九
(三)　公定價格制度……六〇
イ　公定價格制度の目的と方法……六〇

ロ　佛蘭西に於て行はれたる公定價格制度……六二
二　需要供給に關する調節策……六五
(一)　需要を減じて價格を調節する方法……六五
イ　用途を制限して調節する方法……六五
ロ　消費を制限して調節する方法……六七
(イ)　英吉利に於ける消費制限令……六八
(ロ)　獨逸に於ける戰時穀物有限責任會社……七〇
(二)　供給を多くして價格を調節する方法……七二
イ　生産の奬勵……七三
ロ　生産費輕減策……七五
第三章　通貨を中心としたる物價問題……七八
第一節　通貨の增減と物價の高低……七八
一　通貨數量と貨幣價値に關する學說……七九
(一)　金屬說と名目說……七九

イ 貨幣數量說……八〇
ロ 通貨說……八〇
ハ 銀行說……八四
ニ 新貨幣數量說……九二
ホ クナプの國定說……九三
ヘ ベンヂクセンの名目說……九五
ト ヘーイン及カッセルの平價說……九九
チ 「インフレーショニスト」の說……一〇三
第二節 通貨縮小に由る物價調節策……一一一
一 金本位制度の回復……一一一
二 財政緊縮……一一四
三 公債非募集……一一五
四 金利引下……一一七
第四章 我國の物價問題……一一八
第一節 我國物價問題の現狀……一一九
第二節 我國經濟の現狀……一二五
一 輸入超過の現狀……一二五
二 國際貸借の現狀……一二八
第三節 爲替問題と金輸出解禁……一三〇
一 爲替問題と解禁論……一三〇
(一) 爲替相場の下落は經濟上有害なりとの說……一三一
(二) 通貨縮小論としての解禁論……一三一
(三) 自由放任說……一三二
二 我國の現狀と解禁私論……一三二
第四節 物價問題の解決策……一四〇
一 我國の物價問題とその原因……一四〇
二 物價問題の解決策……一四四
(一) 財政緊縮を斷行せよ……一四四

(二) 公債非募集を實行せよ……一四八
(三) 國產奬勵の必要……一四九

物價問題に就て

法學博士　河津　暹

緒言

只今御紹介を戴きました河津でございます。是まで銀行集會所に於て金融等の講演が屢々お催しがあつた、今回は私に出て物價問題に就てお話を申上げるやうにと云ふことでございます。如何なる事を申上げることが出來まするか分りませぬが、兎に角お引受を致しまして罷出た次第でございます。

本日から前後四回に亘つてお話を致します。私のお話を致します物價問題の範圍は可なり廣いと思ひますが、餘り廣く致しましたのでは、廣くすれば廣くするだけお話が散漫になつてしまひますから、成るべく限定した範圍に御話を止めて

置きたいと存じます。本日は物價問題と經濟社會と云ふことを申上げます。明日は貨物を中心とした物價問題を申上げます。明後日は通貨を中心と致しました物價問題。最後に我國の物價問題に就てお話を進めて行く積りでございます。

第一章　物價問題と經濟社會

第一節　物價問題は經濟問題の中心なり

私が申上げる迄もなく「物價問題は經濟問題の中心を成して居るものであらうと思ひます。何故に物價問題が經濟問題の中心を成して居るかと申しますれば、現代の吾々が行つて居る經濟生活は、一言で申せば價格生活であるからであります。卽ち値段を中心として吾々の經濟生活が營まれて居るのであります。隨つて價格の高低は吾々の消費生活の上に於きましても亦生產並に營利生活の上に於きましても、重大なる關係を持つて居るのであります。」吾々は或收入所得を以て生活を行ふのであります。此際吾々が購ひ求めます物の價格卽ち値段が假に高くなつたとしましたならば、吾々は多くの物を買ふことが出來ない、吾々の購買力が少なくなる譯であります。隨つて其少ない物を以て吾々の消費生活を行ふのでありますから、吾々の消費生活の內容は自然に貧弱にならざるを得ないと云ふことは明瞭であります。又一面に於きまして、吾々が生產者或は營利を行ふ者としての立場で申しますれば、吾々が生產又は販賣致しまする物の價が高くなりますと自然吾々の收入所得が多くなつて來る譯でありますから、生產者として或は營利を行ふ所の者として、價格の高くなることを希望することは申上げる迄もない。この物の價の問題が吾々の經濟生活の上に於て重大なる關係を持つて居ると云ふことは申上げる迄もないことだと思ひます。故に物價問題は經濟問題の中心であると云ふことは御承認下さることであらうと存じます。所で物價の高低に準じまして國民各自の收入所得が增減をして行くものであつたならば、經濟上何等の問題を生じませぬ。例せば物價が倍になつたとすれば之に準じて吾の收入所得が倍に殖えたとしますれば、今まで一圓拂つて居つた所の物を二圓拂ふと云ふだけの話。總ての人々の消費生活なり或は生產營利生活の內容に何等の變化を生じないのでありますから物價問題は申上げる迄もない値打のない

問題になるのであります。併しながら實際に於てはさうは行かない。價格の高低に準じて吾々の收入所得が增減をしない。一方に於ては物價が騰貴致しまするに依つて之が爲に大なる利益を受ける者がありますと同時に、他方に於ては之が爲に大なる不利益を被る者が生じて來るので、物價の高低と云ふことが吾々の所得關係吾々の財產關係に一大變更を來たすのでありますから、物價問題は自然に喧しい問題にならざるを得ないのであります。

第二節　歐羅巴戰爭と物價問題

殊に獨り我國と云はず歐羅巴諸國でも或は其他の世界の諸國でも歐羅巴の戰爭が起りましてから御承知の通り物價に大變動を生じた。之が爲に今申上げました國民收入所得に大なる變化を生ずるやうになつた。又國民の財產の上に大なる變化を生ずるやうになつた。又吾々の消費生活の上に大なる變化を生ずるやうになつた。其變化の甚しくなつたと云ふことは私が申上げる迄もない吾々が體驗して知つて居る所であります。それで經濟史の敎へて與れる所に依りますと、丁度ナポレオン戰爭後に於て英吉利の物價は非常に變動を致しました隨つて物價の變動致しましたことは前古未曾有と言はれて居つたのでありました。併ながら其前古未曾有と言はれましたものも、それ程酷い變化はして居らない、極く高い時と極く安い時とを比較しましても、數字などを申すことは煩さいことでありますが二倍にはなつて居らない。而も其の大なる變化が起りましたのは十三年位の間に於てのことである。所が御案內の通り近年に於ける世界物價の變動は、國に依つて勿論是から段々申上げて行くやうに違ひがございますけれども數年間に於てそれに數倍し、或は數十倍する程の變化を生じたのでありますから其激烈であり又經濟上に及ぼした影響が甚大であると云ふことは殊に申上げる迄もないのであります。其歐羅巴戰爭に至ります迄は暫くの間物價は比較的に安定を得て居つたものであるといふことが出來る。御承知の通り重要なる諸國は金本位制度を採用して居る、隨つて其等の國では金が中心になつて居つたのであります。唯〻殖民地であるとか或は其他特殊の關係にある國では、金本位制度を國內の事情に於て採用することが出來ないが、一方には金本位國との貿易其他

の關係があるから、所謂金爲替本位制度を採用し、國內に於ては銀本位制度を維持するに拘はらず、國際貿易等に於ては金を中心と致して行つて居つたことは御承知の通りである。斯くの如くなつて居りましたものでありますから、詰り貨幣の對內價値も亦對外價値も稍〻安定を得て居つた。」それでラフリンの說明して居る所に據りますと、千八百九十五年頃が物價の一番安かつた時でありますが、それから少しづゝ物價は上りつゝあつた。之に就ては議論がございますが、貨幣の產出額は近年に於て段々多くなりつゝある。殊に西曆千九百八年頃から金の產出額が多くなつて居るやうであります。さう云ふやうな次第で金の產出額が段々增加して居りますから、隨つて金の存在額が增加して來まして、外の事情が同じでありますならば貨幣の價格は幾らか下落する傾向を持つ。隨つて之に伴つて物價は幾らか騰貴しつゝある傾向を持つて居つた。物價は私が申上げる迄もなく高くもならず安くもならず卽ち常に高低をしないで安定をして居ると云ふことが理想であるに相違ない。併ながらそれは事實上望むことが出來ない以上は、幾らか物價が高めになつて居ると云ふことが經濟社會に取つて先づ結構なことであると云はれて居る。それは事業等を營む者に取りまして利潤が多くなり若干の刺戟を生ずることになるからです。企業界が突飛に景氣附いては害がありますけれども、幾らかづゝ活氣を帶びて居ると云ふことは經濟界から云ひまして喜ばしいことである。勿論其喜ばしいと云ふことは現代の經濟社會組織を認めた上のことであります。隨つて物價が幾らかづゝ高くなつて來る、賃金がそれに後れて高くなつて行く傾向を持つのであるから、何時でも賃金の上つて行くのは原則として物價の騰貴して行くのに後れる傾があるのであります。それでありますから勞働者としての議論から言ひますと假令少しと致しました所で物價が段々上つて行くと云ふことは喜ぶべき現象で無いのかも知れませぬ。併ながら此の如き問題に就て申上げやうと云ふのではない、現代の經濟社會組織を認めた上は經濟界が幾らかづゝ刺戟を受け企業が振つて居ると云ふことが喜ばしいことであると云ふことが言へる。其意味に於きまして物價は先づ安定を得て居つたといへるし金の價格が幾らか安くなる傾向を持つ結果として、資本が段々に增加して行く、從つて利子步合は下落する傾向を持つて居つた。利子步合と申して

も色々な條件に由つて違ひが出て來るのであるから、之を比較すると云ふことは甚だむづかしいのであるが、例へば千九百年に紐育の保險會社が諸國の金融業者に手紙を出しまして、利子の歩合は高くなるであらうか低くなるであらうかと云ふことを問合せましたものがありますが、其時に於て有名なる金融業者は擧つて利子歩合は段々下落して行くものであると云ふ回答を致して居ります。そんなことを申上げなくても事實は色々な統計や何かを御覽になれば、利子歩合は下落の傾向を持つて居つたことが分る。其方面から致しましても企業界が矢張り刺戟を受けて活氣を呈して居ると云ふ有樣である。所が歐羅巴の戰爭が突發致しましたが爲に、茲に經濟界が大混亂を惹起するやうになつて參りました。第一には種々な貨物の需要と供給の上に大混亂を生ずるやうになりまして、それが爲に物價が非常な變動を見るに至りました、貨物の需要を增加致したものゝ中に於て、最も顯著なるものを擧げて見ますれば、戰爭其ものに直接の關係のありました物の需要は非常に增加した。軍需品であるとか食料品であるとか云ふやうな物は、非常に需要が增加致しましたから、是等のものゝ價格は非常に上がつてしまつた。

又そればかりではない戰爭に依つて特に資產を增加した者がある。申さば成金がある。其結果としまして其等の者の購買力が又殖えた、之に依つて又物の需要を增加した程度も少なくないと云ふことであります。又一面に於ては物の供給が非常に減少しました。それは戰爭に關係のないものはどうしても企業が衰へざるを得ない生產が減ぜざるを得ないと云ふことになりますから、供給額が少なくなりまして是が爲に又其物の價格の上に大なる變化が起りました。一々どう云ふ物があると云ふことを申上げなければ餘り抽象的でありますけれども、諄くさう云ふことに手間取る必要もないと思ひます。又交通の便が惡くなり交通が閉塞致した其關係から、供給の上にえらい影響を及ぼしまして、それで供給不足を告げると云ふことからして價格の高くなつたものが少くない。或はこれ等の原因に基き物價が將來高くなるであらうと云ふことは豫測が出來るのでありますから、之に準じて所謂投機的作用が伴ひまして以て物價を高く致した貨物も多くございます。又物價が高くなつたが爲に生產費を增加し其結果價格が高くなつて參つたものも多くあります。又戰爭を繼續するが爲に租稅其他の公課が非

常に增加し、それが爲に生產費が上つて價格を高めたものもあります。多くの壯丁が戰爭に引張り出されて居ります爲に勞働者の不足を告げる、又一面に於ては資本の缺乏の爲に生產費が高まつて、之が爲に他の事情が同じであつても價格を高めたものも少くございませぬ。斯くの如くに抽象的に申して見ますれば、物の方に於きましても他の事情が同じであつても、物價が大に騰貴して行くべきだけの十分なる原因はあるものだと存じます。併ながら申す迄もなく是等は特殊なる貨物の上に起つた所の變化でありますから、申さば物價問題と致しましても部分的の原因を爲して居るのに止るのであります。然るに一般的に物價を騰貴せしめた原因としては、私が申上げる迄もなく通貨の膨脹を第一に擧げざるを得ないのであります。是は御案內の通りに諸國が戰爭の爲に金本位制度を繼續して行くことが出來ない、それが爲に金本位制度を棄てゝしまつたものが少なくないのであります。」例へば獨逸の如きものになりますれば既に戰爭が始まると直に金本位制度を棄てゝしまつた。卽ち千九百十四年八月四日の法律に依りまして、帝國の出して居る紙幣を法貨とすると云ふことが第一條に書いてある。第二條に於ては帝國の中央金庫は帝國の紙幣に對し又は帝國銀行は其銀行券に對して兌換の義務を負はないと云ふことを規定して居ります。是に於て兌換制度を止めてしまひ又紙幣本位の國になつてしまつたのであります。是れは一番早くやつたのでありますが、其餘の國と雖も到底金本位制度を持續して行くことが出來ない。それで國內に於ては成べく金貨は使はずして紙幣でやつて行く、さうして國際間の支拂には何うしても金でなければなりませぬから、是は先づ第一に戰爭の方に使ひますが爲に、政府は金を借上げたり、或は又色々な公債等の方法に依りまして金を引上げてしまつて、それを戰爭の用に用ゐたのである。さう云ふやうな次第でありますから唯〻金を其方に充てゝ、それで紙幣本位になつたと云ふことであるならば、通貨の方から言ひますならば大した變化は起らない譯でありますのに、戰爭は段々長引いて行く、戰費は追々嵩んで行くと云ふことでありますから、學者の所謂「造つた購買力」に依つて戰爭を持續して行かなければならないと云ふことになつて參つたのである。其結果はどうなつたかと言へば、申上げる迄もなく通貨の大膨脹を來たしたのであります。それがどの位膨脹したか、國に依つ

て勿論違ふのであります、私も曾て自分の書きました或る論文の中にも引證して置きましたが、ブラッセルの國際財政會議の報告書に千九百十三年十二月と千九百十九年十二月とを比較しまして、通貨の膨脹率をざつと擧げて居ります。それに據つて見ますと、北米合衆國、南米諸國、英吉利の殖民地に於きましては、通貨の流通額は戰前に比べまして五割から十割、卽ち倍だけの增加を爲したのであるが是等は寧ろ無難の方である。それで英吉利や日本や歐羅巴の中立國に於きましては通貨の膨脹が十一割から二十二割前後までになつて居るのであります。又葡萄牙や佛蘭西、白耳義、伊太利と云ふやうな所に於きましては、通貨の增加が二十五割から五十五割、卽ち五倍餘に上つて居るのであります。其他の歐羅巴の交戰國に於きましては、通貨の膨脹は實に八十割を超えたと云ふことであります。それでありますから物價が非常に暴騰して參りましたのは當然であるといへます。それで此處にも持つて參りましたが、キーンスの「モネタリー、レフォーム」の中に於きまして、卸賣相場の指數の增加致しましたことの表を掲げて居ります。之に依つて見ますると云ふと數でありますから煩さうございますが、戰爭の起りました年を標準としますと物價は騰貴しまして、千九百二十年の物價指數は英吉利では二百九十五、佛蘭西は五百十、伊太利は六百二十四、獨逸は千四百八十六、北米合衆國は二百二十六、加奈陀は二百五十、日本は二百六十、其他色々ある。千九百二十年が先づ一番高い所であるのであります。それで英吉利其他多くの國に於ては、それからは段々下り氣味になつて居ります。けれども、獨逸や露西亞の如きは言ふに及ばず、伊太利の如きものは幾らかは安くなつて居りますが、例へば千九百二十三年を採つて見ますると卽ち五百八十二になつて居りまして、千九百二十年の六百二十四に比して左程に安くはなつて居りませぬ。又佛蘭西の如きは千九百二十年の物價指數五百十が二十三年には四百十一になつて居りますから、是も幾らかは下つて居りますけれども、下り方が少ないのであります。日本は今申しました如く千九百二十年の時には二百六十と云ふことになつて居りましたが、此計算に依つて見ますると二十三年には百九十二、卽ち二倍前後になつて居ると云ふことになつて居るのであります。兎に角戰爭に由りまして一時は非常なる騰貴を致しました。それで多くの國に於きましては是から段々申して參りますが如く、物

價問題は經濟生活に大關係を及すべきものであり、又及した所のものであるから、一生懸命に之を調節しなければならぬと云ふ考で、鋭意熱心に調節を致しまして、出來るならば戰前の狀態に引戻さうとしたのであります。之には議論がございます、一派の論者は戰前の狀態に引戻すなんと云ふことは無理である。後に申しますが、そんなに戻さなくても宜いものだと云ふ絶對的の議論もございまするし、又戻すことを努めるのは宜いけれども、戰前の狀態に戻すと云ふことは無理である。國に依つては金の產出額が段々殖えて居る、それであるから歐羅巴戰爭が起らなくても、必ず物價は高くなつて行くべき譯である、物價が騰貴したと云ふことは、戰爭自體にのみ由つて起つて來たものと斷ずることは出來ない。勿論戰爭があつた爲に非常な騰貴をしたことは爭ふべからざる事であるけれども、假に戰爭がなくても物價は若干上つて行くべきものであるから、戰前の狀態にまで物價を引下げると云ふことは無理な註文であると論ずるのであります。例へばケンメラーの著書或は論文などを御覽になれば其の一斑を知ることが出來ます。かくの如く溫和な考を持つて居る人からでも反對はありますが、兎に角多くの國では一生懸命になつて物價調節をやりましたから、例へば英吉利の如きは二百九十五と云ふ指數が千九百二十三年には百五十九卽ち五割位の高さに引戻すことが出來た。北米合衆國の如きも光程申上げましたやうに二百二十六と云ふ所迄上りましたものが百五十七矢張五割少し上の高さ迄引戻すことが出來たと云ふやうな有樣であります。こゝに注意しなければならぬのはこの程度まで引戻すことを得たのは諸國が努力した結果であるといふことです。要之、物價騰貴の近年の勢は十九世紀の初め十三年の間に於て二倍にも足らなかつた所のものが前古未曾有の騰貴であると言はれたものに比較すれば、驚くべきものであつたと言ふことが出來ます。又其結果と致しまして通貨が膨脹しそれで貨幣の價値が動搖し之に準じて爲替相場も亦大混亂を致すやうになりました。勿論通貨が膨脹しまして物價が酷く騰貴致した國に於いて、爲替相場が下落致した程度が最も甚しかつたことは申す迄もない。爲替相場の數字の如きものも一々此處で申上げることは煩はしいことでありますから、それを讀上げることは省いて置きたいと思ひます。斯の如くに物を中心と致しました方に於きましても、物價が非常なる變動

を來した。又通貨を中心として考へました所に於きましても亦非常なる變化、大動搖大暴騰をするやうになつて參つたのであります。

第三節　物價問題の經濟社會に與ふる影響

所で斯の如き物價騰貴が如何なる影響を經濟社會に及したかと云ふことは吾々が考へて見なければならぬことだと思ひます。

一、企業家勞働者に與ふる影響

是は私が諄く申上げるまでもない話で、企業家にとりては大體から申しますると物價が大に騰貴致しますれば利益を齎すのであります。併しながら急激なる騰貴殊に其騰貴の程度が上に申しましたやうに原因が複雜でありますから必しも同じではありません、一方には或企業家は非常に利潤を獲得して所謂成金等を生じましたのでありますが、他方に於きましては却て之れが爲に不利益なる狀態になつた者もありまして大混雜を來たしました。併し乍ら大體から云ふと多くの此の問題を觀察して居ります者の議論では、企業家其者には利益があつたと云ふことである。從前は物價の騰貴して參ります程度が甚だ徐々でありますが爲に、眞面目に堅實に事業の經營を行つて參つた者が、急激なる物價の騰貴のためにさう行かなくなつてしまつた。所謂投機熱、思惑熱が非常に强くなつて參りまして、隨つて企業家の態度が少なからず堅實性を失ふやうになつたと云ふことは一般の傾向であると云ひ得るのである。それで勞働者の方には何う云ふ影響があつたかと云ふと之も國に依つて一樣ではないやうである。普通の時に於ては先程も申上て居るやうに物價が甚しく騰貴しますするにつれて止を得ず賃銀が高くなつて行つたものであります、物價の騰貴が先に起り、勞働者の賃銀の增加が後れて居ると云ふ所謂大原則には背かないのでありますが、物價騰貴の勢が甚しいものでありますから、勞働者の中に於ては非常に困つた者がある。其勞働者の中でも筋肉勞働者の如きは勞働市場に於きまして、賃銀が却て高くなつて行つたのでありまして、其害は割合に少なかつたと云ふことでありますが、定額の俸給等を受けて居る者などは、是も物價が甚しく騰貴しましたが爲に其の俸給等も上つて行つたには違ひないけれども、其俸給の上りました程度なり或は時間なりは、普通勞

働者に比べますれば遙に後れて居る。隨つて物價が大騰貴を致しました爲に一番苦しかつた所の者は却て定額の俸給等を受けた所の者であると云ふことを申して居るのであります。之れに準じまして所謂自由職業者も矢張り物價騰貴の爲にそれだけ多くの報酬を受くることが出來なくして困つた者である。斯く申さば却て知識階級の者の方が物價の激變の爲に筋肉勞働者に比較して困難を見ることが多くなつた所から、勢ひ是等の者が生活の爲に現代の經濟組織等を呪つたのであります、卽ち思想が荒んで來ると云ふことは之に原因することが少なくはないと思はれます。併しながら却て交戰國の中では勞働者の賃銀の高くなつたことは物價騰貴に勝るとも劣らない所も少くないと云ふことである。隨つて斯の如き國、斯の如き範圍に於ては勞働者は戰爭等の爲に却て利益を受けて害を受けることが無かつた者もあるやうなことはキーンスの著書などに頻に論じて居る所である、是は主に英吉利の事を對象と致し、まして其れを觀察した所の議論でありますが、交戰國の一部に於ては斯の如き現象があつた。併しながら其れは今申しましたやうに交戰國のことでありまして、中立國であるとか、或は交戰國でありましても關係の比較的に薄い國に於きましては、勞働者あたりの方が非常に困つた。又一面に於て、例へば資本を持つて居る階級、卽ち是にも色々ありませう、例へば公債などを持つて居つて、其れで生活をして居る、或は年金などで生活をして居るやうな階級になりますると、物價が非常に騰貴した結果として生活は苦しくなつた。物價が騰貴するに伴ひ收入は非常に減つた形になる。それでありますから却て資本を有する階級卽ち「レンチアー」階級は物價が大に騰貴したが爲に困難を見たのであります。それでありますから是も一々細かく申さなくても分り切つて居ることであります。物價が斯の如き大影響を受けましたが爲に、先程申上げたやうに投機熱は非常に勃興して、それで企業界に於ける堅實性は破れてしまつて、眞面目に落着いて仕事をすると云ふことは甚だ馬鹿々々しいやうなことで、一攫千金を夢みると云ふやうな風が非常に興つて來た。是は一度さう云ふ風が盛になつて來ますと云ふと、中々脫けないのでありますから、其餘弊は、日本でもさうかも知れませぬが、方々の國に於ても今日にまで及んで居ると云ふことである、又之に準じ奢侈の弊風と云ふことは自然に起る譯であります。一方に於て

俄に金を儲けた者が贅澤をするからであります。

二、外國貿易に與ふる影響

斯くの如く國内に於て幾多の影響があります、殊に經濟社會に於てそれよりも更に大なる所の影響があつたのは何であるかと云ふと、申す迄もなく外國貿易であります。物價が甚しく騰貴しました爲に――これも關係的の言葉でありまして、例へば我國の物價が高くなつた、併しながら他の國に比較して高くなり方が少なければ、其點に於ては害がない譯でありますけれども、他の國に比較して物價が騰貴しました程度が高くありますか、或は他の國が物價調節を行ひました結果物價を下落せしめることが著しいとすると、貿易の上に影響を及ぼすことは申すまでもない。其の結果はどうなるかと云へば、申すまでもなく、物價が高くなれば輸入が增加して輸出が減少して來る。物價の安い處には物を賣る譯に行きませぬ、高い處には物が這入つて來ると云ふことになりますから。殊に我國のやうな外國貿易を必要とする國に於きまして、其影響は殊に顯著なるものである。御案内の通り我國の如きは、色々の經濟問題を說きまするに當りまして、我國の經濟市場が如何にも狹いと云ふことは忘るべからざることである。市場が狹い、隨つて工業等を營みまするに方りまして、所謂生產能率を十分擧るやうにして行かうと云ふには、相當大規模に之を生產しなければならないのである。所が相當大規模に生產して行かうと云ふことになると云ふと、是等の生產した物を國内に於て消化することが出來ないから勢ひ其の一部分を外國市場に出さなければ算盤が立たぬと云ふことになるのであります。所が今申上げた如く價格が騰貴した結果として我國の生產品を外國に出すことが出來ないとなりますれば、單に其物品が賣れなくなつたと云ふばかりではない、外國貿易が輸入超過になつて、貿易の均衡を失ふと云ふことになり、尙ほ國内で引合つて居つた所の製造業が引合はなくなる。經濟界の不振、不況を招かなければならぬと云ふことは當然の歸結である。のみならず先程申上げたやうに總ての人の收入所得が皆物價騰貴に伴つて多くなるならまだ宜いけれども、さうはなつて居らないのであるから、卽ち價格が高くなつて來ますれば、自然の結果としてどうしても需要は減つて來る傾向を生ずるのであります。隨つて賣れなくなると云ふことになりますから、之れを

賣らせやうと云ふ爲には勢ひ價格を安くして行く、價格を安くすると云ふことは事實上出來惡いから、品質を落して價格を幾らか安くして需要を喚起しやうと努めた者などもある。併し品實が惡くなつた割合には價格が安くなつて居ない。斯う云ふことになりますから、愈〻以て外國に出すことは出來なくなる。所謂輸入超過の勢を尙ほ助成して居るものであると云ふことは、是も爭ふべからざる事實であります。殊に斯の如き事は今日の經濟界の行詰りを惹起した事に對して大なる關係があるのであります。それで私共から言ひまするならば、我國の經濟界が今日の不況を招きました所の大なる原因は卽ち外國貿易の不振に在る。輸入が超過して來る、輸入超過が甚しいと云ふことが經濟界を不振ならしめたのである。輸入超過を今日のやうに甚しからしめた大なる原因は他にも有りませうけれども、多くの場合に於きまして、物價が甚だ高くなつたと云ふことが其原因であると云ふことは、是れ亦爭ふべからざる事であるのであります。でありますから多くの人々は今日にならぬ中に、何とかして物價調節をしなければならぬと云ふことを繰返し繰返し言つて居つたことである。物價の調節をしなければならぬと言つた言葉は決して間違つて居つたことでは無かつたが、併しながら物價を調節することは、是から段々申して參りますやうに、如何なる方法に依つて見ても卽ち企業家等には惡い影響が起るのであります。不景氣を招來する譯であります。景氣が好かつた時に於て不景氣を招來する譯になりますから、中々耳を藉して貰ふことが出來ない。又政治家等は斯の如き不人望なる政策を行ふことを喜ばない。餘程思ひ切つた物價調節を行はうと云ふ先見果斷の政治家が出て來るか、或は國民が物價騰貴が社會に惡い影響があるものであると云ふことを痛感して、それで政治家を援助して、之をして其政策を實行させない限りは、中々斯の如き不人望なる政策を實行することは出來ないのであります。それでありますから我國の如きは今日の行詰つた狀態を惹起すに至つたものであると思ふのであります。それは尙ほ後に申上げます。所で斯の如く外國貿易の方に於て物價騰貴と云ふことが惡い影響がある。輸入超過を來す。又是と同時に物價騰貴の爲に爲替相場が混亂する、自分の國の貨幣の價が下ると云ふこと卽ち貨幣の對外價値が減少すると云ふことは、成程或る意味に於て輸出を奬勵することの結果になる。

自分の國の物價が外國に對しては割合に安くなつたと云ふことゝ同じ事になるのだから、隨つて上と反對に外國に對して輸出を奬勵することになる。「輸入を阻碍すると云ふことの結果にはなるのでありますが、併しながらそれも爲替相場の安定を得て居る時に其事が出來るのであります。爲替相場の安定を得ないと云ふことになると中々貿易は出來ませぬ。」のみならず獨逸などに於て著しく見た如く、自分の國に輸入をしなければならぬ品物が幾らもある。其輸入する品物が甚だ不利益な狀態になるのであるからして、結局自分の國の「貨幣の對外價値が下落した時に於ては、得をするのでなくして害を被る。況や其國の爲替相場の關係に於て反對の位置に立つて居る、卽ち爲替相場の安くなつてる國から「ダンピング」を喰つて居ると同じやうに輸入が盛になる。現に英吉利などに於きまして、卽ち獨逸の爲替相場が下つたと云ふことに於て、獨逸の品物が潮の如くに這入つて來るので非常に困つたのであります。是は問題は違ふのでありますが、投賣をされたと同じ事になるのでありますから、之を喰止める策を講じなければならぬが、單り物に於ての「ダンピング」を防止するに止らず、外國の爲替相場が下つて來る事から起つて來た輸入の增加に向つて適當なる方法を講じなければならぬと云ふことが喧しい問題になつて居つた譯でありませう。

三、財政上に與ふる影響

又單り是等の對外貿易などに止りませぬ、財政上に於ても物價騰貴は面白くない影響を及したのであります。それは私が申上げる迄もない、卽ち物價が騰貴しますれば、政府の色々な支出が非常に殖えて來なければならぬ。前と同じ事をやつて居るにしても、勢ひ支出が增加して來なければならぬことは言ふ迄もないのであります。況や戰後の經營に關聯して種々なる仕事を爲さなければならぬやうになりましたものですから、方々の國に於て驚くべき財政上の膨脹を來したのであります。殊に歐羅巴の交戰國に於きましては莫大なる戰爭の費用を負擔しなければならぬ。一部分は色々な公債や何かの形に於て、成たけ負擔を繰延べる工夫を考へたのでありましたけれども、それに致しましても租稅其他の負擔は驚くべく殖えたのであります。でありますから何れの國に於きましても財政は非常な膨脹を來すやうになつたと云ふことは爭ふべからざる事であります、それで

ありまするから諄く申上げる迄もない話でありますが、物價が急激に而も前に申したやうに戰爭に由つて甚しき程度に起つて參りましたが爲に、是は迚も平常の考を以て之を律することは出來なかつたのであります。

第四節　物價の調節

隨つて何れの國に於ても斯の如き物價の激變に向つては、何とかして物價の調節と云ふことが必要であると云ふことの議論は夙に起つて居ります。是は物價騰貴否物價騰貴の勢が未だ現れて居らぬ中から起つて居つた現象であります。所で吾々に致しました所で、先程から申上げて參りました如く、物價を調節することの必要であると云ふことは議論する迄もない事であらうと思ひますが、是と同時に固より反對論があつたことは忘るゝことが出來ないのであります。

一、物價調節に對する反對論

どう云ふやうな立場からして其反對論が起つて來て居るかと言ひまするとまず一は純理論から來て居る所の反對論であります。其議論から云ふと物價の如きものは是は自然に放任をして置くときには、需要供給の關係からして最も能く調和を保つて行くことが出來るものである、拵つたらかして置くのが一番宜い、人爲的に何か之を調飾するとか何とか云ふやうな事をやると却て調和を害する。それだから自然に委して置く方が宜い。斯う云ふ議論は屢〻日本に於ても亦歐羅巴に於きましても論ぜられた所であります。併しながら是は正しい考ではないと思ひます。なぜかと言ひますと、それは普通の場合に於ての經濟論を持つて參りまして、戰爭に由つて惹起されたやうな非常なる變化の場合に臨まうと云ふことでありますから、無理な議論と思ふのであります。勿論經濟界が普通の狀態に居ります時に、物價が騰貴すべき適當なる原因があつて騰貴して行くと云ふ時に於きましては出來る限り其儘にして置いて人爲的に之を遮るやうな事はしない方が無難である。慾じ手を著けると云ふやうなことは、利害孰れが多いか分らぬと云ふことは、論者の言ふが如きものであつて、自然に放任して置く方が宜いと云ふことが言へるだらうと思ひます。其點に於て私などは何も異論は挾みませぬ。併ながら今問題に致して居りますやうな場合、即ち戰爭と云ふ大きな出來事

があつて、それで物價の上に大なる變化を生じた、而も其變化は前古未曾有で、中々普通の議論を以て之を律することの出來ないと云ふやうな場合に當つて、平常の議論を以て之に望むと云ふことは無理な事である。言ふまでもなく物價を調節すると云ふことは中々むつかしい事であるには相違ありませぬけれども、併ながら之を自然の儘にのみ放任すべきもので無いと云ふことは考へられる事と思ひます。故に歐羅巴あたりに於きましても戰爭が起ると同時に直に物價調節論が起つて居る、否物價調節策を講ずる者が起つて居る。殆ど戰爭の起ると共に物價調節策と云ふものが講ぜられたと云ふことを申上げて差支ない。それで極く荒い所の事を是から申して見たいと思ひます

又第二の反對論は實行上から反對して居る人があります。成程論者の言ふが如くに此異常の時に當つて異常の政策を施すと云ふことは是は仕方がない。隨つて物價調節策を講ずると云ふことは之を承認しやう。併しなから實行上大なる障碍がある。それで實行上からして到底やることは出來ない。理窟は良いかも知れぬが實行上甚だ困難の事である。それは結局どう云ふ事であるかと云ふと、卽ち物價騰貴は上に言ふが如くに大體から言つて生産者或は企業家には利益がある。是も一々に就て言へば不利益を被つた者もありませうが、大體から言へは利益を被つて居るのである。所が强ゐて物價を人爲的に下落せしめやうと云ふことになると、折角儲けて居る企業家に不利益を來すと云ふことになる。それで現在經濟界が景氣が好くて活氣を帶びて居る、所に依りましては貿易なども振つて居る、何れの方面に於ても甚だ結構であるのに拘らず、それを强ゐて色々な方法に依り、例へは通貨の縮小に依つて物價を下げることになつて來たならば、必ず不景氣を招來する。景氣が好かつたものが俄に景氣が惡くなつて來ると云ふことになる。是も自然がやつて呉れたと云ふことならば、已むを得ないが、政治家等に依つて人爲的に儲かるべきものが儲からないやうになる、經濟界が景氣が好かつたのを不景氣にすると云ふことは甚だ面白くないと云ふ反對が起つて來るのである。勿論生産者等をして不測の儲けを得せしめると云ふことは避けなければならぬ事ではあるけれども、併ながら生産者等は物價が騰貴したる後に於て、而も其騰貴が持續して行くものだと見て色々な生産等をして居るのである。だか

ら騰貴した所の狀態に於て色々な算盤を採つて居るのである、然るにそれを急激に價を安くすると云ふことにしたならば、是等の者に不意打を喰はせて不測の損を被らしめると云ふことになる。それであるから此點から考へて見て決して面白い策ではない。斯樣な點から致しまして物價を引下げることに反對を致して居る議論が中々有力である。此實行上の困難と云ふことは先程も申上げて居る通り私も之を承認致します。決して之が容易く出來る事ではない。人が景氣好くやつて居る所のものを、景氣惡く儲けさせぬやうにすると云ふことは、是は實行上に於て困難の事であらうと思ひます。併しながら又一面から言ひますと、今の吾々の收入所得の關係を斯の如くに攪亂し、又財產關係を斯の如くに攪亂して居るのを自然の成行にのみ任して置くべき性質のものではない。それは儲ける人ばかりであるならば宜しいけれども、損をして居る者がある。先程申上げたやうに勞働者の如き者、又定額の俸給を受けて居る者が困難をして居る。又之が爲に社會の思想などが荒んで來る。社會の生活上に大に不安を與へるやうになると云ふことであるに、唯、企業家に不利益を來すと云ふ故を以て調節策があるにも拘らず之を行はぬと云ふ理窟は無い。又物價調節をすると云ふこと卽ち經濟界が茲に或る原因に由つて非常なる變調を呈したのであるから、此變調を元通りにする、換言すれば經濟社會が或る意味に於ては病氣である、熱を出したのであるから、其變調を呈したものをやめて常調に復らせると云ふことは、是れ亦當然の事であると言はなければならぬ。それは遣方は餘程むづかしい。唯、物價を調節すれば宜しいと云ふ單純な議論で進んで行く譯にはいかない。遣方は大に考へて見なければならぬ、成べく害の少ないやうに、成べく不公平の起らぬやうに、成べく不意打をしないやうに、色々の注意を要するけれども、それは實行上の問題であつて、其事がむづかしいからと云つて、此物價調節と云ふことをやらぬと云ふ理窟は無いと思ひます。故に私は實行上の困難と云ふことについては重々お察し申しますけれども、物價調節と云ふことは、必要な事であると考へて居るのであります。又第三の反對論と、致しましては、此物價を引下げると云ふことは一つの方法であるが――尙ほ後に詳しく申上げる場所があると思ひますが、物價を引下げると云ふ事よりは、寧ろ生產を增加すると云ふ方に力を盡すべきものである。物の價を安

くすると云ふことも、それは根源に遡つて言へば卽ち需要と供給との關係である、だから價格を抑へる策も一つの策であるではあらうけれども、併ながら一方に於て生產額を殖やして行く、生產增加の方法を講じて行くことになれば、自然物の分量が多くなつて來る、さうなれば卽ち消費者の立場から言つて害は無い。又企業者の立場から言つても害は無い。それだから人爲的に物價を調節すると云ふことよりも、生產を奬勵し生產額を多くして、さうして自然に物の價を引下げて行く。少くとも生活の必要品、又社會多數の者が需用する物の生產を殖して行くと云ふことにする方が無難の政策である。之が爲には或は却て通貨を膨脹すると云ふことになるかも知れぬ、なつても仕方がない。通貨を膨脹させて行く害よりは、生產を增加して行くことが出來たならば、其方が却て害が無い。然るにさう云ふ事をせずに、唯〻物價の方を下げてしまふ、隨つて生產を縮めてしまひ、企業家に大なる害を與へて、不景氣を招來すると云ふことに依つて、此病氣を癒して行くと云ふことは、是は甚だ消極的の政策であつて、それよりも健全なる遣方は、もつと積極的の方でなければならない。所謂「インフレーショニスト」の議論である。其論は通貨を中心と致した所の物價調節と云ふことに付きましての方で、卽ち通貨の方の問題になりますから却て其時に申上げる方が宜いと思ひますが、私は其議論には贊成をし兼ねるのであります。それが成程害がなく、生產を增加して行くことの出來る方法があれば、それは甚だ結構である。又經濟界が健全なる狀態に居る時に於ては、其方法は決して惡いとは思ひませぬ。併しながら經濟界が甚だ不健全なる狀態になり、變調を呈して居る有樣になつて居りまする時に當つて、斯の如き方法を取ると云ふことが、果して利害孰れにありやと云ふことは大なる疑問でなければならぬのであります。私の承知して居ります限りに於ては、今申上げましたやうな點が此物價調節と云ふことに對しての反對論であるやうであります。

二、物價調節の必要

併ながら私は今ざつと申しました如くに斯の如き議論は正しくないと思つて居るのでありますから、物價調節と云ふことは是非やつて行かなければならぬものである、殊に只今の問題としてよりは、もつと物價が騰貴して居る時の問題としましたならば、物價調節と云ふことを絕叫して止まない所の一人である。それで

ありますから此立場に於て若干物價問題を觀察して見やうと思ふのであります

所で此問題をどう云ふやうに扱つてお話をして行くかと言ひますと、是は物價と云ふことになりますと、私が申上げるまでもなく、單に米の價が高くなつたとか麥の價が高くなつたとか云ふことの部分々々の問題では無い。廣汎なる所の問題である。隨つて喧しく言ふと物價と云ふことは所謂英語で言ふ「ジェネラル、プライセス」の事でありますから、品物を中心としての物價調節と云ふことは考へられない。どうせ物を中心として物價を調節して行くと云ふことは、あらゆる物を安くすると云ふことではないに相違ない。例へば贅澤品のやうな物を安くしやうと云ふことは如何なる人でも考へて居らない。詰り物を中心として物を安くして行かう、物價を安くして行かうと云ふ問題は、社會多數の人が需用する所の物、或は生活の必要品と云ふやうな物を安くして行かうと云ふ問題に相違ないのであるから、卽ち食料品を安くする或は生產の原料を安くして行かうと云ふやうな問題であるのでありますから、喧しく言ひますと物價調節問題の中に加へない方が、純理論としては宜いのかも知れませぬけれども、併ながら是と關聯して離るべからざる所の政策であると私共は思つて居ります。でありますからして色々な物を中心としての物價調節は、如何なる問題であるかと云ふことを簡單に申上げて見たいと思ふ。續いては一般的に關係のある通貨の問題。通貨の問題と言ひました所で是も色々の問題を含んで居るのでありまして、今申上げたやうなもので、通貨の價をどうするか、又安くすると云ふことになるのにはどうすれば宜い。又一方に於て、例へば金本位制度と云ふものが破壞せられたのであるが、金本位回復と云ふことが急務であると云ふやうな議論に對して、金本位制度なんかは回復する必要はない、紙幣本位で澤山であると云ふやうな議論もありますから斯う云ふ問題は大體引纏めてお話を試みたいと思ふのであります。それでそれに關聯致しまして我國の現在の問題を申上げて御批判を仰ぎたいと思ふのであります。本日は今申上げましたやうに諄く申上げる必要はないことでありますが物價が近頃はどう云ふやうに激變を生じたかと云ふことゝ、それからどう云ふ影響があつたかと云ふことを、極めて簡單に申上げた次第であります。明日は物を中心としての物價調節の事を申上げて見たいと思ひます。

第二章　貨物を中心としたる物價問題

第一節　物價調節の目的物は生活必需品なり

昨日に引續いてお話を致します。昨日物價が激變をした場合に之を調節しなければならないと云ふことを簡單に申上げて置きました。扨て其物價を調節すると致しますると、物價は私が申す迄もなく貨物と貨幣との關係でありまするが物の價を引下げると云ふことになりますと、貨物の方面から之を爲すことも出來なければならぬことであると思ひます。又一面貨幣或は通貨の方面から之を行ふことが出來る譯であります。昨日も申述べました如くに、貨物の方面から物價を調節する或は引下げると云ふことは、あらゆる貨物に付いて之を行ふと云ふことは事實上むづかしいのでありまするし、又實際に於きましてもあらゆる貨物に付いて之を行ふ必要はないので、贅澤品の如き物でございましたならば假令其物の價格が高くございましても、之を用ふる者は經濟力の大なる者でありますから斯の如き物を特に國家等が力を以て引下げてやらなければならぬと云ふ理由はないのであります。隨つて貨物の方面から物價を引下げやうと云ふ問題は、生活の必要品、社會一般の人――貧乏人等が用ふるやうな物品のみに限られて居るものであると云ふことを言ひ得るのであります。尤も貨物の方面から物價を調節するに當り、其貨物の生産を奬勵致しまして供給を多からしむることが出來れば同じく價格を引下げることが出來るのでありますが、今日申述べやうと思ひますることは、其方面の調節に關する事ではございませぬ。それは明日申上げる方が便利と存じますから明日に讓りまして、今日は貨物其物を中心と致して、殊に今申上げたやうに食料品であるとか或は工業の原料であるとか云ふ物品の價格を引下げることに付いて國家は如何なる政策を取るべきものであるか、又如何なる効果があり得るものであるか、これ等のことに付きまして極めて大雜駁のお話を試みやうと思ふのであります。殊に歐羅巴戰爭中又戰後に亘りまして、此問題に付きましては多くの國に於て色々な試みを致しました譯であります。隨つて吾々共から申しますると幾多の研究材料を提供して貰ふことが出來たのでありますは是等に付きまして研究を細かく致しますると甚だ面白い結果が出て來ると思ひ

まするし、又それ等を試みたる所の結果等に付きましては、方々の國に於きましてそれ〴〵詳細なる報告書を出して居ります。故に是等に付いて研究を致して見ますれば、吾々は尠なからざる教訓を得るものだと存じます。併し此處には唯〻極めて大雜駁の事を申上げるだけでお許を願はなければならぬのであります。

第二節　物價調節の方法

貨物を中心と致しまして物價を調節して行く方法は自ら二種あると存じます。一つの方法は單に是々の物品の價格だけを調節しやうと云ふ事であります、即ち値段だけを安くしやうと云ふ事であります。もう一つの方法は價格だけを調節すると云ふ事では徹底してやる譯には行かないのであるから、即ち其根源に遡つて物の需要と供給とに付いて或種類の方法を講じまして、之に依つて價格を調節しやうと云ふ方法であります。先づ誰が考へましても是より外に方法は無いと考へられるのであります。強て之に加へるものがありとせば、即ち貨物の生産費を引下げる、さうすれば需要供給の如何に拘らず價格は下つて來なければならない譯でありますから、之を此「カテゴリー」の中に入れて考へても差支へはないものだと思ひます。故に先づ第一に價格だけの調節と云ふ事に付いてどう云ふ方法があるか、又どう云ふやうな事を試みたのであるかと云ふことに付いて若干の講說を試みたい。次に需要と供給に遡つて調節を致しました事歷を是れ亦簡單に申上げて見たい。最後に生産費に關する事柄を附加へて若干申上げて見たいと思ふのであります。

一、價格のみを調節する方法

此直接に色々な貨物に付いての價格を引下げやうと致します方策の中に於きまして、是れ亦自ら二つに分つことが出來ると考へます。其一つは價格を無暗に引下げると云ふことを目的としない。價格を公正ならしむる、正しくさせると云ふことを目的として行ふ事であります。隨つて此方法は高くなるべき原因があり、而も其高くなると云ふことは必しも不正の方法、公益を害するやうな方法に依らずして起りたる場合に於きましては、之を承認すると云ふことになるのであります。隨つて此方法に依りますると、生産者に必しも甚しい犧牲を拂はせやうと

云ふことを期待して居るものではない。生産費が是だけ掛かるからそれに若干の利潤を加へて是だけで賣らせる、他の言葉で申しますれば、經濟界の變動、價格の動搖に乘じて暴利を貪らしめないと云ふことを期して居るのであります。斯の如きものでありますから、性質から云へば甚だ微溫的である、溫和である。必しも甚しく物品の價格が廉くなると云ふことを直接には考へて居らない。隨つて政府は消費者の利益の爲め、一般國民の利益の爲め、或は又工業の原料等に付いて之を用ふる者の爲めに、其價格を甚だ廉くしやうと云ふことになれば生産者は甚しき犧牲を拂はなければならぬ事になるのでありますから、成程工業者に向つて利益を與へると云ふことも、又其工業の原料を生産する者に利益を與へると云ふことも理に於ては違ひは無い譯になりますから、或一部の者に利益を與へやうと云ふ爲めに他の者の利益を害すると云ふことは宜くないのであるから、政府は之に對して相當の犧牲を拂はなければならぬ。言葉を換へて言へば不利益を蒙る者に向つて償ひをしてやらなければならぬと云ふことが起つて來るのでありますが、價格を唯〻公正ならしむる、暴利を貪らしめないと云ふことでございましたならば、政府は何も財政上の負擔を爲す必要はない、卽ち犧牲を拂ふ必要はないと云ふことになるのである。乍併それでは甚だ微溫であり徹底しない。卽ち國民の多數の者が價格が非常に騰貴したと云ふが爲めに、生活其他に於きまして困難を感じて居るのに、唯〻公正なる正しい所の價格だけにして置くと云ふ事だけでは是等の者を救ふことが出來ない。もう一歩進めて卽ち消費者の利益の爲めに、生産者の利益を抑へやうと云ふ所まで必ず行くに相違ない。隨つて第二の價格調節の方法を講じなければならぬ。卽ち貨物の價格を一定の水準に引下げやうと云ふ所の方法である。之になりますると云ふと今申上げたやうに、消費者の方から言ひますれば大なる利益ではございますが、それでは生産者は大なる不利益を蒙らなければならぬことでありますから、必しも國家は之を補塡すると云ふことではありませぬが、場合に依つては財政上の犧牲を覺悟して掛からなければ此方策を取ることは出來ないと云ふことは明瞭であります。前のものならば比較的に廣い範圍に於て之を行ふことが出來る。公正ならしむると云ふことならば、必しもそんなに貨物の範圍を局限する必要はない。それは生活の必要品であら

うが生活の必要品でなからうが、必しも暴利を貪らしむると云ふ理窟はない。だから事實上實行不能のものである、或は實行不能でないまでも實行上甚だ困難であると云ふものならば、之を實行する方面から見て避けなければならぬ事ではないかと考へますけれども、併しながら實行が可能であるものでありましたならば、可なりの廣い範圍に此方法を講じた所で差支がない理窟であります。併しながら貨物の價格を一定の水準に引下げてしまはうと云ふことになりますると云ふと、是はさうはいかぬ。今申上げたやうに生產者の方に不利益を蒙らしむると云ふことになる。或は其結果國家が財政上の負擔をしなければならぬと云ふことになるのでありますから、自然性質と致しまして局限せられたる所の範圍内に於て之を行ふと云ふことが出來ることになるのであります。而して價格を公正ならしむると云ふ方法についても、先づ第一に考へられることは、諸國に於て試みられた方法卽ち暴利取締と云ふ方法であります。

(一) 暴利取締

イ、暴利取締の目的

是は私が特に申上げませぬでも、我國に於きましても試みられた方法である。暴利取締と云ふことは申上げるまでもない、目的から言ひますると國民の生活の必要品等の價格の騰貴を防ぎて、國民の生活を安定せしむると云ふことが第一の目的であらねばなりませぬ。又第二の目的としては、社會の一部の者の暴利を貪ることを制して、之が爲に社會の多數の者に迷惑をかけしめない、と云ふことでなければならない。又第三の目的としては、價格を公正ならしむると云ふことは畢竟するに國民の投機心を抑制しやうと云ふことである。思惑を抑へ付けやうと云ふことである。申上げる迄もない國民の投機心が甚しくなつて來ると眞面目に仕事をする者が少なくなつて來る。或は眞面目に色々な生產等を爲す者をして失望せしめ、一攫千金を夢みるやうなことにでもなつて來ると、經濟上並に社會上の害があると云ふことになりますから、國民の投機心は成べく抑へ付けて行かうと云ふのが暴利取締と云ふことの目的でなければならぬ。以上申上げた三つの目的を以て、暴利取締を行ふのである。併しながら暴利取締と云ふことは何も必しも價格を一定の水準に迄引下げて行くと云ふことを期して居るものでない

ことは申す迄もない。唯〻正當なる利潤を得ると云ふことで滿足せしめやうと云ふことであります。斯う云ふやうな方法でありますが、方々の國に於て行ひました暴利取締令と云ふものを見ますると、自ら二つの部類に分けることが出來ると思ふのであります。

ロ、暴利取締の二方法

(イ) 我國に行はれたる暴利取締令

一つの方法は我國等に於て試みたる方法である。それは若干の貨物に付きまして、御承知の通り買占をしたり、賣惜をしたる場合に適用する。さうして生產をしたり賣つたりする者が暴利を貪つて居るや否や、或は得て居る所の利潤が所謂暴利と認むべきや否や、と云ふことは政府當局者が之を判斷する。政府が見て之は暴利であると認めました時に於て、初めて之を取締つて行かうと云ふのである。我國の如きに於ては御承知の通り之にも幾らか緩みを加へまして、暴利を貪つて居ると認められた者に對して戒告を致しました、それで其戒告を聽いて、さうして止めてしまへば制裁を加へませぬが、併しながら其戒告を肯かずして猶依然として暴利を貪り、價格を上げる、賣惜或は買占をやると初めて制裁を加へると云ふ、そこに幾らか緩みを加へて居ります。方々の國でやりました此種類のものに於きましては、今申した如く戒告を加へ、さうして之を肯いたなら許す、肯かなかつたならば制裁を加へると云ふ幾らかの緩みを附けずに、暴利と認むべきことを致した者に於ては直に制裁を加へると云ふ遣方を致しました所もあるやうであります。併しながらそれは唯〻やる上に於て幾分か緩みを加へただけでありまして、趣旨に於きましては變りはないのであります。是は暴利取締の一つの典型であらうと存じます。併しながら此制度を一寸考へると甚だ惡くはないやうに思ふ。勿論先程申上げたやうに、甚しく微溫的のものでありまして、必しも價格を一定の水準に迄引下げて來やうと云ふのでありませぬから、それで微溫的のものであると云ふことは、是は何れの方法に依りましても同じでありますが、併しながら今申したやうな方法に依つて、此人爲的に價格を釣上げたりなんかし、或は價格の變動に乘じて暴利を貪ると云ふことを無からしめやうと云ふことであります、甚だ正しい適切なる方法であるやうに聞えますけれども、此制度の缺點と云ふものを

拾ひ上げて見まするとと、如何なる程度に至りましたならば、所謂賣惜、買占を行つたものであるといふことを得るかを判別することが困難であると云ふことでございます。申上ぐる迄もない今日の經濟社會に於ては、必しも目の前に在る物だけを以て取引を致して居る譯では無い、又現在だけの價格を目安に致して取引をして居るものではない。隨つて將來價格が高くなると云ふことが考へられる場合に於きまして、何も急いで其物を賣らなければならぬと云ふ理窟は無いのであるから、幾分其價格の上つた所で賣出す、又一面に於きましては價格が將來上ると考へられる場合に於て急いで之を買ふ、さうして或は之を自分の物とし、或は更に轉賣致しまして其間に利潤を得やうと云ふことは、今日普通に行はれて居る事であつて、それが全然賣惜、買占と云ふことが惡いと云ふならば、今日の經濟取引は全部止めて掛からなければならぬと云ふことになるのであります。それでありますから如何なる程度になれば所謂賣惜、買占を爲したるものである、隨つて是は怪しからぬものであると云ふことの判斷を下すか、その程度を判別する上に於て少なからぬ困難があるのでございます、是は諄く申上げなくても分り切つて居ります。

而も其判別は誰が行ふかと云へば、今前に申上げたやうに政府當局者が自分の責任に於て行ふのである。それでありますから政府と雖もさう無暗に自分の力を用ゐて、是は賣惜である是は買占であると云つて、此法令を楯に致しまして權力を以て臨むと云ふことは出來るものではございませぬ。さうすれば事實上誰が見ても甚だ怪しからぬことを行つて居ると云ふ、所謂極端なると言つては語弊があるか知れぬが、可なり程度の甚しい場合に於てのみ此方策を行ふより外に道が無いのであります。是も私が諄く申上げる迄もないことゝ存じます。其結果甚しい場合でなければ取締らなんだと云ふことでありますから、それで此方策の眞實の値打は嘗て我國の當局者が言はれた如くに、所謂傳家の寶刀である、何時刀を拔くか分らぬぞ、併しながら滅多に刀は拔かないと言はれて居るが如く、甚しい場合でなければ行ふものではない。又行はれるものではない、それでありまするから、極端ならざる場合に於ては取締令がありましても實効が擧らぬのであります。暴利を貪らんとする者に對しては若干の脅威となるのでありますから、全然實績がないと云ふことを得ないものでありますが、取締令の未だ活動の初まらない範

國内に於ては、尙公正ならざる價格が存在すると云ふことはあり得るといはざるを得ません、隨つて迚も消費者の希望に添ふやうな程度に迄價格を引下げると云ふとの効果はあるべきものではございませぬ。勿論政府が自由放任主義に由りて價格を騰貴するに任すに比べれば此種の取締がある方が善いことは申上げる迄もないと存じます。併しながら是あるが爲に、其勅令等に依つて限定せられた貨物の範圍に於ての價格が公正なるものであると言ふことを言ふ譯には行かぬと思ひます。それでありますから殊に性質が微溫的のものである上に於きまして、更に微溫なるものであると云ふことを言はざるを得ない。隨つて價格が甚しく變動を致します場合に於きまして、斯の如き方法は無きに優るのでありますけれども、之を以て其目的を達することの出來るものでないと云ふことは申上げることが出來るのであります。

（ロ）英國に行はれたる暴利取締法

是は先づ我國の行ひました暴利取締のことに付いて、極く大雜駁のことを一言致したに止まるのでありますが、是れと違つた行方をして居る暴利取締令は卽ち英吉利に於て行ひました所のものである。英吉利に於きましても頻に暴利を貪る者があると云ふ次第でありまして、甚だ喧しい問題が起つたのであります。英吉利は元來斯う云ふ事に付きましては、成たけ手を觸れない方針を採つてゐた國でございますが、併しながら默つて居る譯には行きませぬから、それで暴利取締令を出したのである。所で英吉利で行ひました所のものは先づ千九百十九年に出しました暴利取締法、所謂「プロフィチアーリング、アクト」と云ふものが其の典型であるかと存じます。是は我國なにかでやりましたのとは全く行き方が違ふのであります。我國の遣方では政府當局者で暴利を貪つた者があると認めました時に於て、若干の制裁を行ふのでありますが、英吉利の遣方はさうではない。暴利を貪られた者卽ち被害者がありました場合に當りまして、其被害者から訴へ出たと云ふ時に初めて當局が動出すのである。それでありますから假令暴利を貪られて居つても、被害者の訴がない時には國家の權力は發動しないのであります。又被害者から訴へ出がありました時に政府の當該機關が果して暴利を貪つたか否やを調査致します。其調査の方法と致しましては、商務省に於て之を調べるのであ

る。又商務省自身が調べない迄も其商務省から權限を委任せられて居る所の者が調査するのである。さうして其暴利を貪つて居り或は貪らむとする事實があつた時に、之に對して制裁を加へるのであります。商務省なり或は商務省から權限を委ねられました所の者がどう云ふ事を調べるかと言ひますと、今取引をせられました所の貨物の價格はどうであるか、賣買せられた貨物の價格は幾らであつたか、それならばそれの仕入値段はどの位である。之を調べます。隨つて今の訴へられた者の得たる利潤はどれ位であるどの位儲けたものであると云ふことを調査する、其調査を行ふにつき商務省或はそれの權限を委ねられたる機關は、何人をも商務省に出頭せしめて、さうして必要なる報告を爲さしむることが出來ると云ふことになつて居ります。併しながら是等の人を引張つて來て、それで色々な價格等を調べるのでありますが、其報告等は總て秘密に致して居ります。之を秘密に致しませぬと後で酷い目に遭はされると云ふやうなことがありますから、是は何處迄も秘密に致して置きまして、決して迷惑の及ばないやうにする。斯の如き方法に依つて今申上げた賣買せられた價格を知り、それで訴へられた所の人の利潤を知り、さうして其取引の眞相が分りましたならば、果してそれが暴利を貪つたか貪らぬかと云ふことを判斷することが出來る。さうして其調査に基きまして商務省等は之に對しまして幾ら幾らの價格で賣買しろ、仕入値段が是れ是れであるから卽ち幾ら幾らの値段で賣つたならば、それが相當の儲けがある。斯う云ふやうに申すのであります。さうすれば其場合に於きまして、暴利を貪つた者が、それより高いものを受取つて居ると云ふことであれば今の宣言した價格と比較して差額だけを返還するのであります。未だ其取引の濟まない場合でありましたならば、所謂宣言せられたる所の價格だけで賣買を行へば宜いのであります。斯う云ふやうな事で價格を公正ならしめやうと云ふのであります。所が今の取引をした所の人が、それは商務省等の調査した所の材料と云ふやうなものが正しくない。決して自分の得たものは暴利でないと云ふやうに考へました時に於きましては、卽ち賣主が其命令に從はない者があると云ふ時に於きましては、卽決裁判を爲さしむる、さうして之に對して相當なる所の制裁を加へる。卽ち卽決裁判に依つて五十磅を越えざる罰金、一箇月を越えざる所の禁錮に處するのであります

す。制裁の重い輕いは問題ではありませぬ。此行き方の方がどちらかと言ふと、暴利を取締ると云ふ方から見まして遙に適當であるのであります。何故かならば、買ふ方の人に取引上不服がある時に訴出させると云ふ途を開いて居る。それで其場合に於て調べる。それでありますから箇々の場合に於て比較的に適當な解決を與へることが出來る。其代りには一面に於きまして、卽ち被害者の方から訴出ない場合でありましたならば、如何程の暴利を貪る者があつても、之に向つては國家の權力の發動は見ない。それでありますから廣く言ひますればいけないのでありますけれども、併ながら被害者がないのである。或は被害者の不平がないのであるかも知れぬけれども、此不平を訴へる途を開いて置いて、卽ち訴へをしない者には救濟をしない、斯う云ふことになつて居るのでありますから、此方が適當であると云ふことは私が諄く申上げる迄もないことだと思ひます。唯〻此事を行はうには卽ち國民に於きまして、自分の利益を衞り權利を衞ると云ふ思想が發達して居る場合でなければ、中々旨く行かないと云ふことは事實上起つて來ることであらうと思ひます。以上陳べた二種の暴利取締制の何れに致しましても微溫的のものであると云ふことは言へる。是等は卽ち價格をば公正ならしめやうと云ふ方策の中の顯著なるものである。卽ち暴利取締令と云ふやうなものは其模範的のものだと思ひます。

(二)　最高價格制度

イ、最高價格制度の目的と方法

併しながら曩に申上げたやうに、もう一歩進んで卽ち價格を消費者の利益の爲に、其水準にまで引下げて行かうと云ふ遣方も色々方法があるやうでございますが、特に注目すべき方法と致しましては二つある。それは一つは最高價格の制度である。他の一つは價格公定の制度である。故に最高價格の制度及び價格公定の制度に就て簡單なる解說を試みます。

最高價格の制度と云ふことはどう云ふ事であるかと言ひますと、例へば小麥なら小麥は幾ら以上に賣つてはいけぬ、米なら米は一石何圓以上に賣つてはいけぬと云ふ最高限度を示すのであります。それでありますから其最高限度以上には上れないのでありますけれども、さう最高限度と云ふものを極めることになりま

すると、各地方々々に依つて、例へば東京では是れ〳〵の物は幾ら以上に賣ることは出來ない、と云ふやうに細かく割つて行くなどと云ふことは性質上出來ませぬ。それでは非常に複雜になつてしまつて、到底其の煩に堪へないと云ふことになるのであります。最高價格を行ひました所は戰爭後方々に有ります。北米合衆國もやりました。英吉利でもやりました。佛蘭西でもやりました、獨逸でもやりました。方々でやりました。所が最高價格制度は全國劃一的のものであります。全國劃一的ではありまするが、穀物の如き物になりますれば、申す迄もなく時期があります。米なら米を一石四十圓と極めた以上は、今月も四十圓であり來月も四十圓であり再來月も四十圓であると云ふやうに、何時迄も最高價格を動かさずに居ると云ふことは、是れ又動いて居る所の經濟界を死んだものとして取扱ふと云ふことであります、から、到底出來る話ではない。それですから此制度を行ひました所では、皆時に依つて最高價格を異にして居る。土地からいへば異にしませぬが時期に於ては異にして居る。例へば英吉利で行ひました例を一寸申上げて見ますれば、千九百十七年に穀物に就て試みた最高價格制度は、卽ち小麥及ライ麥一「クォーター」の價格は千九百十七年十二月一日前は七十三志六片である、併しながら十二月一日からして千九百十八年の一月迄は少し上げて七十四志六片、更に二月から三月迄は七十五志六片、更に四月五月になりますと七十六志六片、それから六月以後になりますと七十七志六片、段々端境期になるに從つて穀物の最高價格を幾らか高くして居ります。而も此最高價格と云ひました所で、吾々が物を賣買致します時に於きまして、販賣條件が必ずしも一樣ではございませぬ。それでありますから最高價格制度を拵へる時に於きましては、勢ひ一定の販賣條件を豫斷しなければならない。卽ち現金で取引をするのであるや否や、或は運賃はどうするとか云ふやうなことに付いて、或る販賣條件を豫斷して掛かつて行くことである。それでありますから其販賣條件の違ふ場合に於きましては價格は勢ひそれより違はなければならない。それだから必ずしも最高價格制度を拵へたと云ひました所で、津々浦々如何なる地方に於ても皆其最高價格以下であると云ふことは言へないのであります。或は或場合に於ては其條件より尙ほ高く、或場合に於ては勿論低い場合もありませう。兎に角其條件に違つて居る場合にはそれより

高くなつても之を認めなければならぬと云ふことである。斯の如きものが所謂最高價格の制度と申して居るのであります。成程是は價格を或水準まで引下げて來ると云ふことに於きましては一つの方法であることを失ひませぬ。併ながら是は又一面に於きましては活きて居る所の經濟社會を餘りに機械的にして居ると云ふ嫌ひは何うしても免れませぬ。何故ならば、假に最高價格を以て賣買せられたと致しましても、物を生産する人から云ひますれば生産費は自ら違はなければならない。割合に安く生産することの出來る地方がございませう、又割合に生産費が高く掛かると云ふ處がございませう。さうして見ると或場合に於ては最高價格では儲けが殆どない、儲けが無いのみならず甚しきに至れば損失を見なければならぬと云ふ地方があるかも知れぬ。又反對に生産費の少い所の者から言へば、政府の定めたる所の價格でも尙ほ相當なる儲けをすることが出來る、或は相當以上の儲けをする者があると云ふことになるのでありますから、一方には甚だ樂な處があるかと思へば一方には甚だ酷な地方があると云ふことで、勢ひ不公平は免れざる事であらうと思ふ。此缺點がございますのみならず、同じ理窟に依りまして所謂最高價格を極めると云ふことが餘程むづかしいことであります。何故かと云へば極く生産條件の惡い地方の生産費を標準に致しまして、價格を定めますれば、勢ひ價格は高くならざるを得ない。さうしますれば最高價格制度を拵へました所で、消費者の方から言ひますれば、大した恩典に與ることが出來ないと云ふ結果にならざるを得ない。されば云つて生産條件の甚だ良い所のもの、言葉を換へて言へば、生産費の少い所の價格を標準として最高價格と云ふものを極めると云ふことになりますれば、成程生産條件の良い所の者では未だ算盤を採ることが出來るかも知れませぬが、其以外の者から言ひますれば算盤を採ることが出來ない。卽ち生産者に取りまして損失を被らしめなければならぬと云ふことが起つて來るのであります。如何に國民の生活必要品を生産して居る者であるからと言つて、又價格が動搖するやうな異常なる時であると言ひました所で、食物を生産する者をば儲けを無くならしむるのみならず、平氣な顏をして損失を被らしむると云ふことは、正しい考では無いと申上げなければならぬかと存じます。それでありますから如何なる地方の生産費を基準として最高價格を極めるかと

云ふことは實際問題としては頗るむづかしい。我國などに於きましても商業會議所等に於きまして、穀物なんかに向つて最高價格の制度を拵へやうぢやないかと云ふ議論があつたやうに聞及んで居ります。併しながらそれは實行することが甚だむづかしいのであります。成程米の如きものは國民の生活必要品であると言ひますけれども、關東の生産費を標準にして、それで最高價格を定めて宜しいものであるか、或は又關西の米の生産費を土臺に致して之を定めて宜いものであるか、又喧しく言ひますと同じ關東の中に於きましても地方々々に依つて違ひ、更に又喧しく言へば生産者に依つて皆違ふと言つても宜いのでありますから、如何なる地方の生産費を標準にして宜いかと云ふことは、之を決することが極めてむづかしい仕事であります。低きに過ぐれば困る生産者が非常に多くなつて來る、消費者は有難いけれども併しながら生産者は困るのであるから、國家がどうでもそれをやると云ふだけの覺悟を以て、損失を補塡するなら別の話、然らざれば中々標準を低く持つて行くことは出來ない。さればと云つて生産條件の惡い所を標準にして米なら米の値段を定むれば、或は一石四十圓が四十五圓になるかも知れない。さうすれば折角最高價格制度を拵へて米の價を比較的低くしやうと云ふ目的は達することが出來ないと云ふことにならざるを得ない。それであるから最高價格の制度は餘程むづかしい事であると云ふことが言へるのであります。

ロ、最高價格制度の實行さるべき時機

戰爭のやうな非常の場合に於きまして、損をする者に對しては國家が之を補塡してやると云ふ覺悟を致した場合に於て初めて行ふことの出來る方法で、平時には於ては容易に行ひ得べきものでないと云ふことは申上げる迄もないのであります。現に獨逸の如き最高價格制度を行ひました時に於きまして、穀物の生産者に賠償致しました所の金額が一年五十六七億馬克の多きに上つて居る。卽ち政府が生産者に損を被らしめたから其損失を補塡して行くと云ふだけの財政上の覺悟を持たなければ、消費者をして滿足せしむる——消費者の利益になるだけの低い價格に引下を行ふことが出來ないと云ふことが言へると思ひます。之が方々の國に於て試みられた所の所謂最高價格の制度でありまして、勿論若干の效果は擧げて居ります、併しながら完全の效果を擧げて居るものであるとは思はれませ

ぬ。それと稍〻違つて居る所の遣方は卽ち價格を公定すると云ふ遣方であります。

(三)　公定價格制度

イ、公定價格制度の目的と方法

最高價格制度も價格公定の一種であるやうに考へられる。國家が價格を幾らと定める、斯う云ふ事であるから同じ事を言つて居るやうに御考になるかも知れませぬが、所謂價格公定の制度と最高價格の制度と云ふものは全然違ふのである。最高價格制度の方は只今も申述べましたやうに、全國に亘つて劃一的に小麥なら小麥、一「クォーター」に付幾らと云ふことに極めて掛かるのであります。それより高くは賣らぬと云ふことになるのでありますが價格公定の制度と申しまするものゝ方はさうではありませぬ。最高價格の方は先程申上げたやうな譯でありますから主として卸賣相場を抑へて行かうと云ふことである、小賣相場の方には手を觸れないものであるらしい。必ずしもさうなければならぬと云ふことはないかも知れぬが、一定の販賣條件を豫斷して掛かつて行くと云ふことでありますから、卸賣相場の場合に於て行ふことである。隨つて卸賣相場が安くてもなれば、自然小賣相場も安くなると云ふことを考へて居るのであります。公定價格と云ふ方は卸賣相場には觸れないで、小賣相場に向つて公定して掛からうと云ふので、吾々消費者の方から言ひますれば、卸賣に付いて、の價格を定められるよりは、寧ろ小賣相場の方が吾々の家計に取つては關係がある譯でありますから、さうして見ると云ふと小賣相場を定められる方が實は吾々に取つては有難い。小賣相場を定めて掛かると云ふことになりますれば、申す迄もない話でありますが、決して全國劃一的に行くなどゝ云ふことは出來る性質のものではありませぬ。勢ひ地方的のものでなければならない。又地方的であるばかりではございませぬ、經濟界は始終動くものでございますから、必しも始終同じやうな價格で小賣を行つて行くと云ふ譯にはいかない。始終變へて行かなければならぬと云ふ性質のものでなければならぬのであります、要は價格を公定して行くと云ふことは、今申上げたやうに小賣相場に關係して居ることであるし、又地方的のものである。それならば其樣なことがどうしてやつて行くことが出來るのであるかと云へば、それは出來な

いことはないのであります。それを戰時並に戰後に於て試みましたものゝ中に於きまして、最も成績の擧つたものだと言はれて居りまするのは、佛蘭西に於て試みた所の方法であります。由て今爰に佛蘭西の制度と云ふものを一言申上げます。

ロ、佛蘭西に於て行はれたる公定價格制度

佛蘭西に於きましては地方毎に物價を公定する委員を任命致しました。さうして其地方に於ける一定の貨物の價格を調査して、此位の値段で賣買すべきものだと云ふことを公けに示すのであります。卽ち其公定價格を其品物を取扱ふ店の店頭に張付けて置かせるのであります。さうすると吾々消費者は、其店頭に於て直に是れ〳〵の物は一「クォオーター」幾らである、或は一升幾らであると云ふやうな事を知ることが出來るのでありますから、之に準據して賣買が行はれると云ふことになる。この方法は誠に實行的である。吾々消費者は經濟界が動くに連れまして如何なる價格が適當なものであるかと云ふことは分らないかも知れない。例へば政府が最高價格の制度を拵へて、卸賣の方を取締つて掛かつた所で小賣相場の方は如何やうになつて居るか、如何やうにも逃げることが出來る。成程卸賣は斯うなつて居るけれども、此處迄持つて來るには是だけ運賃が掛かるから、それでは賣ることが出來ぬとか、或は斯う云ふやうな危險がある、斯う云ふやうな事柄があるからと云ふやうなことで、最高價格より可なり高い値段で吾々消費者が買はなければならぬと云ふことが起らないとも限らない。所が各地方々々に於て其地方に於て其地方の價格を極める人間があつて、是は此價格で賣買すべきものであると云ふことを言つたならば、之に準據して小賣の方法が行はれるのであるから、さうすれば容易く穀物であるとか其他色々の貨物の價を少くとも公正ならしむると云ふことが出來なければならぬ理窟になるし、或は場合に依つてはもつと甚しく行きまして、消費者の希望するやうな極く低い價格にまで引下げてしまふことが出來ないとも限らない。其代りに樂屋はすつかり分つて居るのであります、それに向つて補塡の方法を講じてやらなければならぬ。所で此委員が佛蘭西でやりました所では、各縣の知事が人口四千を超ゑて居るやうな自治區域に於きましては、其委員を選定することになつて、或は人口四千に上りませぬでも

經濟上特殊の事情がある土地であつたならば、其公定委員を選定することになつて居る。さうして其委員は首席の農務部長、又縣廳所在地の商業會議所の指名致します所の商業の代表者四名、其中二名は卸賣商、他の二名は小賣商から指名を致します。それから又縣農會の指名致します農業代表者四名、勞働組合から選出致します勞働者二名、それから區會議員から互選せられました區會議員若干名、又消費組合の代表者二名、是だけの者から成るのでありまして、是等の者が土曜日毎に會合致しまして、色々な材料を集めましてどう云ふ程度の價格が適當であるかと云ふことを極めまして、それを公けに示す。さうすればそれに依つて小賣相場が極つて來るのであります。是は手續が煩瑣である。それで機關が可なり複雜になつて居る。且つ地方々々でありますから、先づ戰時などに於きまして是非物價政策を行はなければならぬと云ふやうな場合では、此處まで行かなければならぬことは言ふ迄もない事と思ひますが、又行へば此方法ならば如何なる時に於ても遺れない事はないと思ひます。唯〻此煩瑣なる機關を設け、煩瑣なる手續を行ふと云ふ事だけが缺點であります。併しながら其勢を厭はないと云ふことであつたならば、之を實行して行くことは出來る譯であります。

二、需要供給に關する調節策

以上申上げました所が先づ單に價格だけの調節策の模範的代表的のものゝ制度の極くざつとした所の解說であります。併しながら先程も申上げましたやうに、價格の調節をもう一歩踏込んで行ふことになると需要供給の方面に涉つて講じなければならぬと云ふことは、是れ亦議論する迄もない事だと思ひます。然らば價格を引下げると云ふには何う云ふ事をすれば宜いかと申しますれば、私が申上げる迄もない、一面に於て需要を減じさへすれば價格は下る。又一面に於て供給を多くしさへすれば價格は引下つて行く。それであるから需要を何とかして減じて行く、供給を何とかして增加して行くと云ふことが、此需要供給を調節しやうと云ふ遣り方である。

（一）需要を減じて價格を調節する方法

イ、用途を制限して調節する方法

所で物の需要を少くして行かうと云ふ遣方の中に自ら二つある。一つは物の

用途を制限して行かうと云ふ方法である。一つは物の消費量を制限して行かうと云ふことの遣方である。孰れも申す迄もない需要を減少して行くと云ふことになるのである。」用途を制限して行くと云ふことはどう云ふ事であるかと言ひますれば、物に依つては色々な用途に用ゐられる、それであるから其用途の中に於ても、詰り吾々の生活に大した必要の無いやうなものには用ゐさせない。斯う云ふ事になりますれば、自然一面に於て需要が少くなると云ふことも言へるだらうし、供給も緩くりして來ると云ふことも言へるだらうと思ひます。」所でどんな事をやるかと云へば、其の遣方には色々ありませう。方々の國に於て色々な方法で試みられたことである。例へば穀物なら穀物に對しても、穀物を成たけ或意味に於ては需要を少くする、裏から云へば供給を多くする、と云ふことにする方法は、穀物には吾々の食料の外酒類を拵へる、或はお菓子を拵へると云ふやうな用途がある。其樣な用途に之を使ふことになれば、畢竟吾々が必要として食べる所の穀物の需要がそれだけ增えるのであるから、さうすればそれだけ價格が上つて行く譯である、それ故そんな物の用途には用ゐさせない。卽ち穀物の如きものを以て酒を拵へてはいけない、菓子を拵へてはいけない、唯〻吾々の食料にのみ使ふ。斯ういふやうな事をすれば勢ひ穀物の價格は下るやうなことになる。或は又電燈料が甚だ高い、其電燈料などを餘り高くしないやうな方法と致しましては、例へば店頭の裝飾とか「イルミネーション」などに電燈を用ゐることを禁じてしまふ。申す迄もなくそんな物に使ふよりは吾々の電燈料を安くする方が國民の生活から見て遙に宜いのであると云ふことになるのであります。其例を申上ぐることは煩しくありますが、要は今申上げたやうなことで、要らない方の用途を皆打切つてしまつて必要ある方に品物を用ゐさせやうと斯う云ふのである。さうすれば或る意味に於きましては、其用途に使はれる所の供給が多くなつたとも言へる、或は需要が減つたとも言へる。さうすれば他の事情が變らぬ限りは價格が安くなつて來なければならぬと云ふ事になる。

ロ、消費を制限して調節する方法

又是とは違ひまして用途を制限するのでなく、吾々食料にはするけれども其消費量を制限して掛かる。無暗に食べたり何かするから穀物の價が高くなる。バ

ンの價が高くなる、或は砂糖の價が高くなるのであるから、吾々が用ゐて居る所の消費量其ものに制限を加へて行かう、斯う云ふ事になつて參りますれば、當然の結果と致しまして價格は下つて來なければならぬことになるのである。それで是は方々の國に於て行つた所の事でありますが、何處の國に於ても戰爭の時でも用途を制限する位の事はそんなにむづかしい事ではなければやれない事です。併しながら吾々が必要とする物を制限して行かうと云ふ事であるから、國家重大なる時期でなければ、此方法を行ふと云ふことは困難な事であることは申上ぐる迄もない話だと思ひます。

（イ）英吉利に於ける消費制限令

英吉利では千九百十八年の時に於きまして食料品消費制限令、所謂「レーショニング、オーダー」と云ふものを出して、それで特定の食料品は一定の限度より使ふことは出來ない。それの方法としては卽ち切符を拵へまして、各家族の消費すべき所の分量を限定致して、其以上はどうしても求むることが出來ないやうにしたのであります。さうすれば消費量が限定せられるから、無駄のものを使はないやうになるのであります。其結果自然に需要が制限せられて價格が安くなつて來ると云ふことになるのであります。一例を擧げて見ますれば英吉利なんかでやつた例は、食料品なら食糧品の切符は一日に四枚だけ渡して置く、それで一枚の切符を以て購ふことの出來るものは、生の肉は五「オンス」である。先づ一人が三枚の切符卽ち十五「オンス」だけは買ふことが出來る。一枚の切符は「ベーコン」だとか「ハム」だとか「チース」だとか云ふものを買ふことが出來ると云ふことにして、それより以上は使はれない、此處まで行かうと云ふのであります。それで是は消費を抑へ付けて行かうと云ふのでありますから、隨分思切つた遣方である。隨つて戰爭等國家危急の場合愛國の至情に訴へるとか、或は物價問題に就て國民が餘程理解のある場合でなければ、實行しても不平が起つてしまつて、到底行ふことは出來ないことになるのであります。所で此の遣方を徹底的に行ひました所のものは、御案内の通り國家が一定の品物に向つて配給を其手に握つてしまふ。卽ち其國で造る所の生產物を、色々な機關で國家の手に集めてしまふ。さうしてそれを段々に分けてやるやうにすれば、言ふ迄もなく卽ち價格を制限することも出來やうし、又分

量を制限することも出來やうし、如何なる事も出來る譯である。積極的に行ふと云ふことになれば配給を國家の手に集めてしまふと云ふことが良い事に相違ないであらうと思ふ。其事を行ひました國の中で最も顯著なるものは御承知の通り獨逸である。

（ロ）獨逸に於ける戰時穀物有限責任會社

獨逸に於ては殊に食物の需要供給を調節するが爲に、所謂戰時穀物有限責任會社と云ふものを起しまして、强制的に之をして穀物を監理させると云ふことに致しました。此會社は必ずしもあらゆる穀物を買收する必要はないのであります。併しながら何時でも其手に收めることが出來るやうな仕組にして置いたのであります。それには各帝國内に於ける所の生産者から、自分の所ではどれだけの物が出來ると云ふ報告を集めて置いて、或は其中に於きまして若干の物は自分の所で使ふかも知れぬが、併しながら出すことの出來る物はどれだけあると云ふことを調査して置きまして、必要のあつたときには直接なり或はそれの下に附いて居る所の機關に集めてしまふ。卽ち一時に取上げては仕舞はないけれども集めやうと思へば何時でも集めることが出來るやうな仕組にして置きました。さうして直接なり或は其下に附いて居る色々な機關を經てやつて居る中に、遣方は違つて來ますけれども、要點は色々な機關をして、各家族なら家族に就て、例へば穀物はどう、「ミルク」はどう、「チース」はどう、人間一人に就て幾らであるから、お前の家族は一日に幾ら要ると云ふやうな表を渡しまして、さうして是れだけの物をお前に給與すると云ふことの分配をチャンと明かに致しまして、それで矢張り切符のやうなものに依つて、それを買ひに行くことが出來る。勿論其價格が幾らであると云ふことが切符になつて居りまして、それを超ゆることは出來ないのであります。獨逸に於て色々な生活の必要品を監理致した事に付きましての材料は、其當時集めましたものを若干持つて參つて居りますが、多數の御席で御覽に入れる譯には行きませぬが、今申上げたやうな譯で、各家族なら家族が幾人どれだけの物が要ると云ふことを皆書出させまして、さうして今申上げました、配給機關の地方的の支部から致しましてそれだけの用意はして置くので、此處に（種々の切符の實物を示して）色々な切符があります。此切符を持つて行つてそれで買つて來ることが出來

る。それに値段が皆附いて居りまして、其値段で買ふのである。高くも安くもならない。それで生産者から此配給機關が買取りまする時には、それは相當な値段で買上げる、まさか損をさせて買上げると云ふものではありませぬ。併しながらそれを分配する時に於きましては、色々な事を參酌致しまして、成るたけ安い所の値段で配給すると云ふことでありまして、若や算盤を入れて見て損が行きましたならば、それは政府の方の負擔にする。斯う云ふ事に致しますれば初めて穀物や何かの生活必要品の價格を、或所まで調節せしむると云ふことが出來るのであります。是は戰爭のやうな時であるからやれたのでありまして、平常では中々そんな事は出來ない事であらうと思ひます。けれども理窟から行きますれば此處まで行かなければ、徹底的に物の方からして價格を調節すると云ふことは困難であると存じます。

（二）供給を多くして價格を調節する方法

以上は需要の方面から申しました事でありますが、供給の方面から致しますと供給を成たけ多くすると云ふ事であります。是も考は極めて簡單でありまして畢竟するに色々な物に付いて輸出を禁止する、或は輸出を制限すると云ふことゝ、輸入を奬勵すると云ふことゝ及び生産を奬勵すると云ふことである。さうすれば申す迄もなく供給が多くなる、供給が多くなれば價格は下つて來ると云ふことになる。それで輸出の禁止或は制限或は輸入の奬勵、是等の事に付きましては議論する迄もない方々の國で行つた事であるし、何等解說を試むる必要はないと思ひますが、生産の奬勵と云ふことに付いては一言せざるを得ない。之が旨く出來れば一番良い事であるに相違ない。

イ、生産の奬勵

何故かと云へば物價問題の解決ばかりではない、詰り其國に於ての自然の富源を開拓する上に於てから申しましても、多くの生産者を拵へると云ふことになり或は生産者をして割合に多くの儲けを得せしむると云ふことになるからであります。假令物價調節の目的を達しない迄も、生産を奬勵すると云ふことが出來れば甚だ結構であると云ふことは議論する迄もない。併しながら此事は結構であるだけ、又何も此問題ばかりではない。從來とても既に試みられて居ることであ

るに相違ない。それは成程戰爭と云ふやうな事が起つた爲に、平常は考へて居なかつた所、例へば英吉利などに於きましては、御承知の通り英吉利が自由貿易制度を採りましてから農業と云ふものは大に廢れてしまつた。併しながら植民地なり或は外國から穀物が這入つて參つて居りましたから、其外國から這入つて來ると云ふことに依つて何等の心配もなく生活をして居ることが出來たのでありまして其處で農業の如きものは放擲して置いた、さう簡單に言つて了つてはいかぬかも知れぬが、ざつと申せばさうであつた。所が歐羅巴の戰爭が起つて制海權が如何やうになるか分らない、又航海中を脅されると云ふやうな事があつて、英吉利の如き僅に自分の所で消費する農産物の七分の一位しか生産することが出來ないと云ふやうな事實に直面致しますれば、默つては居られない事でありますから、大騷ぎをやつて農業の奬勵を始めました。或は又佛蘭西の如きに至りましても、御承知の通り佛蘭西は經濟上最も大切なる地方を獨逸軍の爲に占領されてしまつた、又一面に於きましては戰場に赴きました所の壯丁の數は九百三十何萬と云ふ中の八百三十九萬人程が徵發されて戰場に出たのである、さうすると殘る所の者は極めて少い數にならざるを得ない。卽ち九百萬ばかりの壯丁の中に於きまして百萬足らずの者が自國に留つて生産等に從事して居る。斯う云ふやうな譯でありますから生産が非常に減少すると云ふことは考へられることである。それであります從から色々な方法を講じて生産を奬勵すると云ふことが起つて來ると云ふ譯であります。故に之を實行すると云ふ上から言へば、先づ戰爭中に於ては勿論、戰爭でない時に於きましても、算盤を採つて利益のあるやうな事であれば、決して吾々が棄てゝ置きませぬから、必ず生産を致して居つた譯でありますから、さうして見ると更に其上に生産を奬勵すると云ふことは隨分無理な事をしなければならぬと云ふことにならざるを得ないのであります。故に議論と致しましては何でもない何もむづかしい事でも、誰が考へましても分り切つて居る事でありますが、實行上から言ひますると、供給を多からしむるが爲に生産を奬勵することは中々容易でないのであります。

ロ、生産費輕減策

以上申上げましたのが卽ち需要と供給の兩面に亘つて價格を調節して行かう

と云ふことの二三の方策である。それで最後に一言して置かなければならぬことは、是は後の問題にも關係することでありますが、生産費を輕減すると云ふことになりますれば、他の事情が同じならば價格は安くなつて來ると云ふことは言ふ迄もない事と信じます。それでありますから此の生産費を輕減すると云ふことは誰も氣が付く事であるが、扨て之を實行すると云ふことになると中々むづかしい。是の主なる問題は後の方で申上ぐる場所があらうと思ひますから、其主なる事は後廻しにして置いて此種の政策の中に於て實行し易い所のものは、生産費を安くすること、殊に政府が行ふと云ふ場合に於て實行し易い所の方法と云ふものは、或る特殊の品物の關稅なり或は內國稅を輕減するか又は撤廢するか、是なら政府の財政の犧牲だけを覺悟すれば出來る、さうすれば生産費は安くなる、隨て價格は安くなつて來る。又運賃を輕減すると云ふことであれば是れ亦同樣である。殊に其國に於きまして鐵道國有の政策を取つて居ると云ふことでありますれば國家が財政上の犧牲を拂ふと云ふことに於て覺悟すれば容易く出來ることである。或は又此生産に課して居る租稅等、例へば營業稅の如きものを輕減する、是も國家が財政上の犧牲さへ覺悟すれば出來ることでありますから、物價問題が大事なものである生産費を安くすると云ふことが大事なことであると云ふ事が分りさへすれば、直に出來る事であると云ふことが言へる。併しながら是は國家ばかりの仕事ではない、各事業家が色々な生産費を安くするが爲に、所謂冗費を省いて行く、さうして生産能率を擧げて行くと云ふ事は獨り物價問題ばかりではありませぬ。色々な方面に於て極めて大事な事であります。此點になりますると必要ではありますけれども、中々實行上は幾多のむづかしい問題が出て來る。是も甚だ大事なことで、是は政府の方の直接問題ではないが、考へて貰はなければならぬ事でありますから、此點に付きましては若干講說して見たいと思ふのであります殊に此問題は我國などに於きましては色々議論のある事でありますから、卽ち我國の物價問題を申上げるときに若干議論を試みたいと思ふのであります。

以上申上げました所は極く荒つぽい所の話でありまして、細かい事を申上げますれば、もつと多くの時間を戴かなければ出來ませぬ。大體貨物を中心として物價調節をする主なるもの、又試みられたる所の主なるものが、どう云ふ性質のもの

であつたと云ふ極く簡略なるお話を致した譯であります。今日は是だけで御免を蒙ります。

第三章　通貨を中心としたる物價問題

第一節　通貨の增減と物價の高低

本日は通貨を中心と致しました物價調節と云ふことをお話致します。前々回に申述べましたやうに歐羅巴諸國に於きましても、金本位制を廢しまして紙幣本位になりまして以來、通貨は著しく膨脹致しました。此通貨の膨脹に從ひまして物價が著しく騰貴致しました。隨つて此物價を調節する爲には通貨を縮小しなければならぬと云ふ考が起つて來ることは當然の事であるやうに考へます。併しながら此事は私が申上げる迄もなく、通貨の增減が物價を高低するものであると云ふことを前提として認めて居るからで、卽ち通貨が多くなつたのであるなら通貨の價値が下落致して物價が高くなり、又通貨を縮小しましたならば、通貨の價値が增加して物價が下落する。通貨の方が原因になつて、或は通貨の增減が原因になつて物價の高低を來す、斯う云ふことでなければならぬのであります。併しながら此前提に就きましては御承知の通りに古來激烈なる議論がある所でありまして今日に至るまで猶ほ決する事が出來ない問題であります。茲には此議論に就いて細かい事を申すことは避けたいと思ふのでありますが、通貨を中心として此物價調節と云ふことを御話しするに當りましては、若干此問題を申して置かなければならぬかと思ふのであります。故に極めて簡單に此問題を御話して本問題を御諒解下さる土臺と致したいと思ひます。

一、通貨の數量と貨幣價値に關する學說

(一)　金屬說と名目說

通貨或は貨幣の數量と貨幣の價値とに關しては、御承知の通り全く異つて居る二つの學說が並び立つて居るのであります。若し之を名付けましたならば或は金屬說と名目說と云ふことになるのであります。卽ち貨幣は金屬でなければならない、卽ち其實質があればこそ貨幣の價値があるのである、斯う云ふのが金屬說の根柢になつて居ることは私が申す迄もない。

イ、貨幣數量說

隨つて此考から出發しまして、通貨の數量と物價の關係を論じましたものが御承知の所謂貨幣數量說と云ふものであります、彼の英吉利のリカルド等が頻に唱へた所の議論でございます。リカルドの說きました形に依りますと、詰り一國に現存して居る所の通貨の數量は物價とは正比例を爲して居るものである、通貨が多ければ物價が高い、通貨の數量が二倍になれば物價は二倍になる、斯う云ふのであります。隨つて通貨を增減せしむる事に依つて物價を高低せしむる事が出來ると云ふのでございます。

ロ、通貨說

それで其の說を承けて所謂通貨說「カーレンシー・セオリー」と云ふものが生じて參つたのである。この前にも申しました如くに、英吉利に於てはナポレオン戰爭後物價が甚しく騰貴致しました。隨つて物價問題が英吉利に於てもやかましく議論されたのであります、其際に於てリカルドは今申したやうな通貨を增減せしめる事に依つて物價を高低せしめる事が出來ると云ふ貨幣數量說を唱へたのでありまして相當の反響があつた。其考を受繼ぎまして通貨說と云ふものが起つて來た。是は後になりまして所謂ロード・オヴァストンとなりました。サミュル・ジョーンス、ロイド等が頻に唱へた所の議論である。「其議論に從ひますと卽ち通貨の增減に依つて物價を高低せしむると云ふが、金銀貨幣の如きものは增減せしむることが容易でない。のみならず金銀貨幣の如きものは自ら調節するものである。卽ち金屬貨幣が其國に多過ぎると云ふことになれば、必ず輸入超過と云ふことになりまして、其結果貨幣が海外に出る。それで金銀貨幣の數量は減つて來て適當なる程度に止まる。又其國の必要に應ずるだけ金銀貨幣が無いと云ふ時になれば、物價は安くなる、其場合に於きましては輸出が多くなつて來て、其結果貨幣が這入つて來る、それが爲に又適當なる程度迄は貨幣が增加して來る。故に金銀貨幣は自ら調節をするのであるから、之に對しては左迄心配をする必要はないのである。從つて通貨の增減と云ふことの問題は主として銀行の信用に依つて發行する兌換銀行券に關係して居る所のものである。故に通貨を旨く調節すると云ふことの問題は、畢竟するに銀行券或は兌換券を旨く調節すると云ふことの

問題でなければならない。是は自然には調節はしないのである、から、殊に兌換券で無い所の不換紙幣の如きものになつたならば、愈〻以て調節はしないのである、さうして見ると此場合に對して最も考へなければならない。一體一國の通貨と云ふものは或は貨幣と云ふものは、總て金銀貨幣でなければならぬ、是が常態である。所が若し其傍に信用に依つて出す銀行券等があつたならば、恰もそれは其國の貨幣が全部金銀貨幣である場合の如くに調節をさせなければならない。それであるから多過ぎると云ふことであるならば之を縮少しなければならず、又少な過ぎると云ふことであるならば之を增加しなければならない。恰も一國の貨幣が全部金銀貨幣になつて、さうして自ら調節するが如くに自然には調節する事の出來ないものも調節をさせて行かなければならぬのである、と云ふ議論が所謂通貨說と稱して居る所のものである。何れも通貨を增減すると云ふことに依つて物價を高低せしむることが出來ると云ふ立場に居る所の議論であります。其議論に基きまして英吉利の如きは御案內の通り、千八百四十四年に銀行條例と云ふやうなものが出來て、それて恰も全通貨が金銀貨幣なるが如く、縱令それより以外に兌換券が出ても、是は一定の限度に留むべきものであつて、決して濫に銀行が信用に依つて通貨を膨脹せしむると云ふことが出來ないやうに法律で制限を加へて行かうと云ふ譯である。此邊の事は私が申上げるより皆樣の方がお詳しい譯である。

ハ、銀行說

丁度斯う云ふやうに通貨が原因であつて物價が高低する、隨つて通貨を增減せしむる事に依つて物價を調節する事が出來る、又しなければならぬと云ふことの議論に對しまして、反對論として所謂貨幣と云ふものは必すしも金銀貨幣である事を要しない、卽ち實質がある事を要しない。紙片でも何でも宜いと云ふ議論から出發しました所謂銀行說――「バンキング・セオリー」なるものが起つて參つたのであります。之を唱へましたのが有名なッックである。それでッックの有名なる著書物價史の中に於て、ナポレオン時代に於ける物價騰貴の趨勢を研究したのである。それを研究して見ると決してリカルドなどの議論、或はオヴァストンなどの議論のやうに通貨の方が原因になつて物價の高低を來して居るのでは無い。物價

騰貴と云ふものゝ方が先に起つて來る。さうして通貨殊に兌換券と云ふものは後に膨脹して居る。さうして見ると今のオヴァアストンなどの言つてるやうに、通貨の增加の方は原因に非ずして結果である、故に通貨を縮少したり何かすることは無理な事である。それで物價を調節しやうなんど云ふことは無理な事である。例へば茲に百萬圓なら百萬圓の取引があつて、其取引が物價が騰貴して假に倍になつた、さうすれば二百萬圓の取引になつた、二百萬圓の取引になれば之を旨くやつて行くと云ふのには、どうしても茲に二百萬卽ち前の倍だけの通貨がなければ出來ない。それを唯々人爲的に如何なる方法を以てするを問はず、通貨を縮めて見ると云ふことになれば、不便になるだけの話である。決して何等の效果はない。さうして見ると若し物價騰貴と云ふことが經濟社會全般に取つて喜ぶべき事でないと云ふことが言へるならば、それは物價騰貴其物を調節して行くと云ふ策を講じなければならぬ。それは物價が騰貴して來ると云ふことは、畢竟需要供給の關係に基づき物の方の原因から來て居ることである。それであるからして昨日申上げたやうに之を實際に行ひましたのは、一部分一部分の事を最近に於て行つたのであるが、詰り物の方の需要を減少する、或は物の方の供給を增加すると云ふ方策を講ずると云ふことに依つて物價を引下げなければならぬ、さうすればひとりでに通貨も縮小して行つてしまふ。銀行が通貨の必要がないのに通貨を膨脹させやうと言つた所で、それはどうしても膨脹する事の出來るものではない。必要以外の通貨を出したと云ふことになれば發行銀行に歸つて來てしまふ。それであるから銀行等が兌換券を多く出すとか出さぬとか云ふやうなことは何等差支のない話である。それであるから若し物價騰貴が良くないと云ふことならば、外の方に向つて然るべき政策を講じなければならない。然るに之をひつくり返して卽ち通貨の方を虐めて見たつて不便を來すばかりであつて、何等の效果はない。斯う云ふやうに申す議論が御承知の通り銀行說と云ふものである。その根柢は所謂名目說から出發して來て居るものである。それの聯絡等に付いて十分說明を致しますには尙ほ委しく申上げなければなりませぬけれども、先づ大體の考の行方は今申上げましたやうな譯である。議論の焦點は通貨と申しましても、此通貨と云ふ言葉が甚だぼんやりして居る言葉でありまして、此の中には本位貨

幣、補助貨幣の總額が這入ることは言ふ迄もなく、兌換銀行券も通貨の中に這入つて居るのであります。其れだけでもまだ合點を致しませぬで、少くとも銀行の當座預金と云ふものも通貨の中に入れなければならぬ。通貨の數量と云ふことを言ふ時にはそれ迄算へなければならぬ。いやそれだけでもまだ足りない、卽ち約束手形であるとか其他の信用證券であるとかいふ類のものまでも加へなければならぬと云ふやうな、――卽ち通貨と云ふ分り切つて居るやうな文字でありながら、物價問題に於ける通貨と云ふことの意義に付いては大分議論のある所でございます。

それ等を何處迄擴げて行つて宜いものであるかと云ふ問題に就ては、私は此處で學校めいて議論をして行かうと云ふのではありませぬ、併し中心は兌換券であらうと思ふ。それに附加へまして或はフィッシャーなどの言つて居るが如くに、銀行預金・當座預金ぐらゐの所までも加へたものとしてお話を進めて行つて宜からうと思ふのであります。併しながら是も細かいことを議論をする時になりますれば、其通貨の範圍に付きまして詳細な研究を遂げなければならぬことは言ふ迄もないのであります。兌換券と云ふものを中心として此問題がやかましくなつて居ると云ふことの根本問題に遡つて來れば、成程金銀貨幣と云ふものゝ價値の根源と云ふことに付いてもやかましい議論がある事でありますが、更にそれとお隣りになつて居る所の今の兌換銀行券と云ふものゝ問題に付きましても、やかましき議論がある。否大概の場合に於きましての通貨と物價との關係に於て議論の焦點になつて居りますことは兌換銀行券であらうと思ひます。卽ち中央銀行が金利を引上げれば兌換銀行券が縮少する、金利を引下げれば是が膨脹する、だから物價が高くなると云ふやうなことで議論をされて居るのでありますから、其兌換銀行券が議論の焦點になつて居る。それで一面に於ては卽ち貨幣の方が原因になつて物價に響く、又一方の方は物價の方が原因になつて通貨の方に響く、一體どちらが原因であるか、どちらが結果であるかと云ふことの議論で、畢竟するに今言ふ通り並び立つて居る所の說が爭つて居るのであります。何故そんな議論が起つて來るかと言ひますれば、申す迄もなく兌換券と云ふものは性質から言ひますれば信用證券である。銀行なら銀行の信用に依つて出して居る所の書付に過

きない。本來の性質から言へばそうである。所がそれが轉々流通して居ります、廣く行はれるに至りまして、信用證券の性質が段々薄くなつて貨幣の性質が大分加つて來て居る。詰り信用證券と貨幣と云ふものゝ二つの性質を具備して居るものであります。それでありますから通貨を原因と觀て物價を計つて行かうと云ふことは、畢竟するに兌換券の貨幣の性質の方のみを觀て、信用證券の方の性質と云ふものを忘れて居る所の議論である。又一面から言ひまして卽ち物價の方が原因であつて通貨の增減が結果であると云ふ議論は、是は兌換券の信用證券と云ふことの方面の性質のみを觀て、貨幣の性質の方を觀ない議論である。平たく言へば丁度楯の兩面を兩方から見て喧嘩して居るやうな狀態であると思ふのであります。我國などに於きましても御案內の通り、物價問題が起ると云ふと必らず此議論が起る。いや通貨が膨脹して居る、だから縮少しろ、斯う云ふ議論。いやさうではない、通貨の方は後であつて物價が騰貴したから通貨が出たのである。兌換券がどつさり出たのである。それを縮少しろと云ふことは無理な話であると云ふやうな議論が起るので、新聞などを御覽になつても始終此議論は繰返し繰返し行はれて居る所の問題である。又通貨の方が原因になつて物價に響くと云ふことになれば、畢竟するに中央銀行などの責任如何と云ふやうな問題に引懸りが出て來るのである。物價の方が先であつて通貨は後から引摺られて行くものであると云ふ議論から言へば、卽ち金融機關の方は責任はないのであります。若しや物價騰貴が惡ければ物價騰貴が惡いのである。それは需要供給の方面を何とかして行かなければ救濟することが出來ない。銀行家は何も責任のあるべきものではないと云ふことの責任問題の引懸りが出て來る。大概の場合に於ては水掛論である、どつちが原因であるか、どつちが結果であるか、やかましく青筋を立てゝ議論をして居る時には大概分らない。唯々兩方關係のある事だけは間違ひなく分つて居るのであります。物價の變動と通貨の增減を「グラフィック」を取つて御覽になれば何時でも大體一致して居るのであります。併しながらそれだけの圖を見てどちらが原因である、どちらが結果であると云ふことを斷定することは餘程むづかしい事であります。どつちかにあるに相違ない、けれどもそれは分らない場合が多い。併しながら時經つてから色々な外の材料等を集めて來れば、

物價の方が先に動いた卽ち原因であつたか、或は通貨の方が原因であつたかと云ふやうなことは自ら分つて來べきものであらうと思ひます。それは楯の兩面であるから、どちらの方にあつたのであるかと云ふことは時經つて見れば分るのでありますけれども、時經たない其時に於て夢中になつて今日の前に現はれた問題として、何れが原因であり何れが結果であると云ふことは俄に斷定する事が出來ない場合が少くないのであります。公平に考へて見ますと今申上げた事は大體お感じになる事でありませう。それでありまするが歐羅巴戰爭後に起つた現象の如きものは、兎に角通貨の數量に大變動を來すべき理由があつて變動を來して居る。隨つて又其方からして物價の方に大變動を來したものであると云ふことは議論をする迄もない明かな事であるかと思ひます。色々な人が說いて居りまする所に據りましても、戰爭が始まりましてから二年の間と云ふものは寧ろ物價の方が通貨の膨脹に先になつて騰貴して居るやうであります。それは此前申上げたやうに戰爭に直接なり間接なり關係のある物の需要が大いに起つたり、又直接に戰爭に緣の薄い物の方の生產が縮まり、供給が少くなつたからかくの如き物價に大變動を生じたもので御座いませう。それに準じて通貨の方に影響をして來たのである。併しながらそれは戰爭の始まりの間の事であつて、それから後になつては通貨の方が色々なる原因に由つて膨脹して居る。それに從つて物價に大變動を來して居るようであるのです。是は偶々今の問題に依つて申上げたのでありますが、又話を戻しまして先に申しました所の銀行說及び通貨說と云ふものがやかましく議論をして居つて決定しないのであります。學問と致しましても決定せずに居るのであります。併しながら假に通貨說或は之に類似し居る說の方が正しいと致しましても、リカルド等の說いて居りますやうな簡單なる形に於ては之を承認する事は困難である。何故かと言へば其國に現存して居る所の通貨の供給卽ち數量と云ふものだけで考へて居つて貨幣の需要と云ふ方は此問題の中には考へて居らぬのであります。そればかりではありませぬ、同じ貨幣の數量でありましてもミルの所謂貨幣の巧程「エフェシエンシー」卽ち貨幣の速力——流通の速力と云ふやうなことは眼中に入れて居らぬのであります。又信用と云ふものが此貨幣に及ぼす影響などを眼中に入れて居りませぬから、甚だ不完全な

ものであつて、其やうな單純なる形に於ては假令通貨の方が原因であつて物價の方に影響を及ぼすことが大體の骨子であるにしても、之を肯定することは出來ないのであります。

ニ、新貨幣數量說

フィッシャーは所謂新貨幣數量說と云ふものを唱へた、卽ち物價と云ふものは貨幣とそれに速力を掛けたものと、信用券に速力を掛けたものとを寄せ集めた所のものと正比例をして居る。又取引額卽ち貨幣の需要額と云ふものと反比例をして居る。是は有名な公式でありますが、さう云ふことで說明を致して居る。併しフィッシャーの言つて居る信用といふのは、是は先程も申上げて居るが如くに當座預金と云ふことの意味であつて、卽ち約束手形や或は帳簿上の信用等の事は加へて居らぬやうであります。又此貨幣と信用と云ふものとの關係に付きましてもフィッシャーの說いて居る所に依ると、卽ち銀行の準備金は銀行の預金とは略一定の比例を保つて居るものである。又個人、商店、會社、組合等は其現金の取引と「コミッテー」の取引との間には矢張り略一定の比率があるものである。隨つて現金所有と云ふことと預金高と云ふものとの間には一定の比率がある、割合が存するものであると云ふことを認めて居る。それであるから其前提の下に今申上げたやうな公式を以て此貨幣の方から動いて來るものであると云ふことを言ふのであります。今日若干の議論がありますが、此樣な形に於て本問題を諒解して行く者が割合に多いやうであります。卽ち此形に於ての貨幣數量說を認めて居る者が多いやうであります。それで歐羅巴に於きまして金本位制度を棄てゝさうして紙幣本位になつて通貨が膨脹した、それで物價が騰貴した。それであるから物價を引下げて行かうと云ふのには先づ第一にやるべき所の事柄は何であるか、根本問題に遡つて行けば金本位制度を回復するにあると云ふ議論がこの論旨から出て居るのであります。

ホ、クナップの國定說

甚だ議論見たやうな事ばかり申して煩さいのでありますが、先程も申上げました銀行說の流を受け、又それの根本になつて居る所の貨幣の名目說の流を受けてやかましき主張が起つて參りましたのは、獨逸に於ける彼のクナップと云ふ人の貨

幣の價値の國定說、卽ち貨幣なんど云ふものは何も金であらうが銀であらうがそんな事はどうでも構はない、紙切でも何でも宜い、國の力に依つて貨幣の價があるのだ、ざつと申せばさう云ふのである。さうすれば一生懸命になつて金本位制度を回復する必要はない。斯う云ふ議論になつて來る。成程今日のやうにどつさり出て居つてはいかぬ、それは如何に國定說で國が定めると言つた所で、無暗な事をやつてはいかぬから、それは然るべく縮少しなければならぬけれども、何も一派の人々が言つて居るやうに、金屬貨幣を回復しなければならぬと云ふ理窟はないぢやないかと云ふ議論になつて來るのであります。それで獨逸の學者から言ひますと、クナップの所謂國定說と云ふやうなものは、貨幣の議論と致しましては一大發見であつて、恰も貿易の方に於きましてアダム・スミスが御承知の通り自由貿易論を唱へた、英吉利の學者は之を祖述したに反對して十九世紀の半ば前にリストが出て來て、保護貿易論を唱へてアダム・スミスの議論を破壞してしまつたのと同じようにリカルド其他の英吉利の經濟學者が唱へて居つた貨幣の數量說或は貨幣數量說を根據として居る所の、貨幣は實質がなければならぬと云ふことの議論を、クナップが現はれて根柢から覆してしまつたのである。それであるからして丁度クナップの議論はリストの保護貿易論に匹敵すべき位なものであると云ふやうに力瘤を入れて居る人などもある。其議論が正しいと云ふことになると、此物價調節問題の議論は大分變つて來る。是は何時迄議論をして居つてもまだ只今に於ては決定をして居らぬのであります。から、議論は繫がつて行くので、銘々好む所に從はなければならぬのであります。するが、今申上げたクナップの國定說の流を汲んで、殊に獨逸の如きは御承知の通り通貨は非常に膨脹した、隨つて物價も非常に高くなつて居りますから、色々な議論が出て來ると云ふことは當然な事であらうと思ひます。

へ、ベンヂクセンの名目說

所で其クナップの議論を受けて頻に名目說式の議論をして居りまするのはベンヂクセンであります。ベンヂクセンの議論に從ふと、是も細かい事を申上げる必要はないと思ひますが、骨を折つて金本位なんかを回復する必要はない、それだから紙幣本位で澤山である、何を苦しんで金本位を恢復しそれで通貨を縮少する必

要は無いではないか、併しながら現今の通りではいかぬ。そんなにどつさり出して居つたのではいかぬから、それは然るべき適當な程度に迄はしなければ健全なる形にはならぬと論じてゐます、私を以て之を觀れば是は極端論であらうと思ひます。何故かなれば卽ち紙幣は言ふに及ばず兌換銀行券と云ふやうなものは、是はやかましく言ふと貨幣では無い。信用である。隨つて信用の基礎として固いものでなければ貨幣制度は旨く行く道理はない。信用制度が健全なる狀態になる道理はない。さうして見ると卽ち信用制度の基礎を鞏固にして健全なる形にしやうと云ふのには、ベンヂクセンの言ふが如くに紙切でも構はないと云ふことならば、基礎が甚だ薄弱であると言はなければならぬ。よしんばそれで太した間違がないものであるとした所で基礎は弱いものに相違ない。それであるから若し或る事件が起り金融市場に變動が起つたならば直ぐに信用制度が破壞されると云ふ危險があると考へられます。信用制度が破壞されると云ふことになれば、安心して商業取引が出來ないと云ふことになるのであるから、詰り大騷ぎをやつて金本位制度を回復すると云ふ必要はないと云ふことは、最低限を言つて居ることで、此形に於てやつて居ると云ふことが完全であり、大丈夫である、是が理想的であると云ふことを主張すると云ふことは困難であらうと思ひます。假にベンヂクセンの言ふことを相當尊重するとした所で、今申上げた位な事は言ふことが出來ると思ふのであります。假に一歩を讓つて國内に於ては何も金本位制度を回復する必要はない、信用を維持する上に於て紙切でも紙幣でも何でも構はないと云ふことが言ひ得るものだと致しました所で、國際間の取引に於て信用を維持して行く事が是で出來ませうか。それは甚だ困難であると言はざるを得ないと思ひます。是も理想論と致しましたならば、吾々個人の間に於て信用に依つて取引をして、別に金銀貨幣なんどを用ひなくとも用を辨ずるが如くに、或はもつと經濟が進み、もつと色々な事が進んで行つたならば、或は國際間に於ても決して金銀なんどは要りはしない、國際貸借を決濟する上に於て唯〻帳面の上に於て消合ふと云ふやうな事だけで澤山である。借になつて居る、それは又來年になつて消すと云ふやうな事に於て、紙切なり或は帳面の上の信用に依つて遣つて行くと云ふことが出來るかも知れない。或は出來る事が理想であるかも知れない。併しなが

ら斯の如き日の到來すると云ふことは、中々時間の掛かる事であると言ひたい。さうして見ると云ふと今の問題としてはペンヂクセンの議論ではいけない。此前に申上げたやうに、今日の爲替相場が甚だ紊亂して動搖して居ると云ふ時に方つて、ペンヂクセンの議論では到底旨くはいけないと私は思ふのであります。それでありますから通貨を縮小すると云ふ議論に對する一つの反駁論として主張せられてゐる通貨を縮小するペンヂクセンの議論は又貨幣の本質に遡つて反對論を主張してゐるのであります。是は主に獨逸に於て起つて居る議論でありますが、豈啻に獨逸ばかりではありますまい。同じ議論を外の處に持つて行くことが出來るだらうと思ふのであります。それよりは幾らか弱い形になりますが、金本位を回復すると云ふことは認めるが、併しながら戰前のやうに金本位貨幣を流通せしむる必要はない。斯う云ふ議論は是亦多くの人に依つて言はれて居る議論であります。丁度日本などに於きましては卽ち金本位制度を採用して居る、併しながら國中には金本位貨幣と云ふものは流通して居らない。それで正貨準備卽ち金貨など云ふものは、詰り國際貸借を決濟する用にのみ用ひて居る。是だけで充分である。だから國際貸借を決濟することが出來る程度にだけ金を持つて居りさへすれば宜い。それで其基礎の上に兌換券を出してゐるので澤山である。斯う云ふ議論であります。

ト、ヘーイン及カッセルの平價說

單純なる形に於て主張してゐるのは、ヘーインと云ふ學者であります。少しく說き方は違ひまするが、近頃色々な本を著して御承知でありませうが、カッセルの議論も先づ大體是であると私は思ふ。詰り爲替相場を旨くやつて行く、國際間の取引をやつて行くと云ふことの上に於て、金なら金が要るのである。併しながら國內の物に於きましては其基礎の上に置かしむれば宜いのであるから、必ずしも從來の如くに金貨幣を流通せしむる必要はないと云ふ議論のやうに思ひます。併しながら貨幣の所謂平價と云ふことをやかましく言ふのでありますから、其事に於てヘーインの議論は國內の物價の方をやかましく言つて居るのであるし、カッセルの方は貨幣の方が主になつた議論であると私は思ふのであります。是も讀む人に依りまして見方は違ふかも知れませぬ。併しながらカッセルの議論は、近頃評

判の人でありますが、今の「モネタリー・プロブレムス・オブ・ゼ・ヲールド」世界の貨幣問題と云ふ本に據りましても、或は又近頃出ました瑞典の文字で議論をして居ります「千九百十四年以降に於ける所の貨幣及び爲替」と云ふ書物に於きましても、成程今の點は金本位を回復する、金貨を國内に流通するとか、金本位制度を回復すると云ふことに付きましては、それは今申上げたやうな議論をして居るのでありますが、併しながら大體の議論は決して不換紙幣を今日の儘にして置かうと云ふ議論ではありませぬ。出來るだけ之を縮小してしまはなければならぬと云ふ考であることは、繰返し繰返し言つて居ることである。又實際問題と致しましても、歐羅巴などに於ては成程金本位制度を回復すると云ふことは宜しいのであるけれども、其實行は中々むづかしい。それだから貨幣の方は之を其儘にして置いて、國内の事は國内の事情に依つて解決すると云ふことにして置いて、さうして唯〻爲替だけを旨くやつて行かう、さうしてせめて今日の國際取引の上に於て障碍である爲替相場の非常に變動すると云ふことは國際取引の上に於て甚だ宜しくないから爲替相場の方の安定を得せしむると云ふ方にのみ力を盡さうと云ふのであります。是は今の物價問題と致しましては何う云ふ位置に立ちまするか、是も人に依つて色々それの根本の考は一樣ではございますまいと思ひますが、恐らくはそれ等の議論のある所は國外貿易を旨くしてしまふ。さうして輸入超過になつて居る國ならば輸入超過を成るべく少なくしてしまう。さうすれば經濟が回復する。經濟が回復すると云ふことに依つて間接に物價問題も解決させやうと云ふことが根本の考ではなからうかと思ふのであります。是も一つの見方です。見方でありますが、扨て此金本位を恢復しないで置いて、それで唯〻爲替相場の方の安定を得せしむると云ふことが、果して實行可能なものであるかと云ふことに付いては、甚だ疑はしいのであります。現にブラッセルに開かれた國際財政會議ですが、初めの方では迚も金本位制度と云ふものを回復すると云ふことはむづかしさうである。だからせめて爲替相場と云ふものゝ安定を得せしむる爲に然るべき方策を講じやうと云ふやうな考が割合に强かつたやうに思へる。併しながらゼネーヴの時の會議になりますると、もう其考は大分淡くなつた。段々色々考へて見たのだけれども、金本位制度を回復しないで爲替相場を安定せしむると云

ふことは餘程むづかしいことである、否到底出來る事ではない。それであるから實行上困難ではあるかも知れぬけれども、貨幣制度の國内の方の問題を解決して行くと云ふことが急務である。それには通貨を縮小して行くと云ふことが先づ安全なる方法であらう。と云ふことに多數の者の考がなつて參りましたやうに察するのであります。それは私の好む所に從つてさう云ふ觀察を致して居るのか、そこの所は分りませぬけれども、私が報告等を讀みましただけの感想ではさうなのであります。故に其點から言ひまして矢張り向ふでも物價問題を解決して行かうと云ふのには、どうしても通貨を縮小しなければならぬ、通貨の縮小に依つて物價問題を解決することが出來たならば、初めて經濟界をして健全なる狀態にならしむることが出來る。何を措いても此問題が急務であると云ふやうに考へて居る人が可なりある。但し今申上げたやうに議論の根柢に於て古來爭うて居る所があるのであります。從つて有ゆる學者の議論が今申しました所に一致して居る譯では無いのであります。可なり反對の考が行はれて居ると云ふことは、是は承認せざるを得ないのであります。併しながら多くの人の議論は通貨縮小と云ふことが物價問題を解決する上に於て重要である。それに就て一番健全なる方法は卽ち金本位制度を回復するのにある、是が根本であると云ふことに考へて居るやうであります。併しながら今のは貨幣を何うしやう、金本位を回復しやうとかしないとか云ふことに付いての爭ひである。是も細かい事を申上げれば色々な議論があるが、併しながら通貨縮小の議論に對して先づ强いか弱いかは知らぬけれども、斯う云ふやうな反對論があると云ふことだけは申上げて置かなければならないのであります。

チ、インフレーションニストの說

併しながら又別種の見方から致しての反對論があるのであります。それは卽ち斯う云ふ物價問題等を議論する人から言ひまして、所謂「インフレーションニスト」と言つて――是はどうせさう云ふことを言ふ人は惡口の名前なのです。卽ち膨脹させても構はない「インフレーション」をさせても構はない、斯う云ふ方の議論であると云うて「インフレーションニスト」などと云ふ名前が出來て居るのだらうと思ひます。是は惡口の言葉でありますするが――其議論の要旨を申しますれば、成程通貨の膨

脹、殊に激烈なる通貨の膨脹、それは多くの人に依つて言はれて居るが如くに、經濟界に取つて甚だ宜しくない事であつた。是には異論は無い。異論は無いが左ればと言つて無暗に通貨を縮小する、卽ち自然に行くならば別な話であるが、人爲的に通貨を無暗に引縮めて行くと云ふことは、是亦經濟社會に取つては恰も通貨膨脹と同じやうに決して有利無害のものでは無い。寧ろ弊害が大きいものでなければならない。恰も通貨膨脹と云ふことが、此前申上げたやうに吾々の收入所得財產の關係を攪亂したるが如くに、通貨をうんと縮小すると云ふことは、同じやうに吾々の財產所得を攪亂すると云ふことになるのである。それで物價が高くなつてしまつた、其の物價が高くなつた所で取引をして居る所のものが通貨を縮小されると、思はざる損失を蒙ることになるのであります。吾々消費者として利益を受けると云ふかも知れぬけれども、併しながら經濟社會の者は一面から觀れば消費者であるかも知れぬが、又一面から觀れば生產者である者が多いのである。さうして見れば物を安くすると云ふことは、唯〻消費者と云ふことだけを觀て居るのであるけれども、物を拵へ物を賣る方から觀れば、物が安くなつたと云ふことは是が爲に不測の損失を招いて――成程自分の使ふ物は安くなつた、併しながら自分の拵へた所の物或は賣る所の物が安くなつて收入が少なくなると云ふことになれば、同じく害を蒙むるではないか。だから通貨の大膨脹と云ふことは勿論宜しくないことであるが通貨の縮小も(自然に縮小して行くと云ふことならば、是は別な話であるが)害があると云ふことが此反對論の最も强い所の根據である。それでありまするから先程も申しましたやうに、物價の高低は主として貨物の需要供給から起つて來て居る、それで通貨其物は其結果に外ならぬではないか、さうして見ると云ふと通貨を縮小すると云ふことを考へるよりは生產を奬勵する、さうして供給を多くする。需要の方は餘り此論者は觸れませぬが、物の供給を多くすると云ふことが一番健全なる物價を引下げる方法ではなからうが、所謂生產の增加が物價を引下げる上に於て最も健全なる所の方法である。斯う云ふ議論であります。是は向でも此議論を唱へて居る所の者が少なくないのであります。例へばキーンスの「モネタリー・レフォーム」と云ふ本なども之に近い考の樣に私は讀んだのであります。是は英吉利の話であるが、英吉利の今日やつて居る所の狀態、

何もしないで其の儘にして居ると云ふことが一番健全な、一番安全な方法である。それを通貨縮小論者の如くに、無暗に通貨を縮小すると、却つて所謂角を矯めて牛を殺すと云ふことになるのであるから、宜しくない。其儘にして置く方が一番良い。さうやつて一面に於ては段々に經濟界が良くなつて來るのを待つて、卽ち生産が段々多くなつて來るのを待つて、さうして物價が自ら安定し、物價が自ら調節せられて來るのを待つて行くのが一番良い方法であらうと云ふやうに言つて居るのであります。所で斯の如く唯〻何もしないと云ふことよりも進歩致しまして、何とかして生産を多くしろと云ふ議論を唱へて居る者も亦少なくないのであります。日本でも斯う云ふ議論を聞くのでありまして、私の讀みましたことが間違なく誤解がないとするならば、松方幸次郎さんの御議論などは之に類似して居るものだと思ふのであります。卽ち生産を增加させると云ふことが物價を調節する上に於て一番良い、斯う云ふ議論であります。通貨縮小と云ふことに付いては寧ろ反對なお考をお持ちになつて居られるやうであります。日本のことを餘り惡口を言ふ積りではないのでありますが、松方老公は明治十五年、是はあべこべに財政緊縮卽ち通貨縮小をなすつて、兌換制度を回復された。お父さんがさう云ふ議論だから、息子は其議論を踏襲しなければならぬと云ふ謂れは無いかも知れませぬが、それと全く反對のお考が出て居ると云ふことは、甚だ不思議と言つては惡いかも知れませぬが、注意すべき事である。何れが是か何れが非か、それは自ら時が解決して呉れる事であらうと思ひます。それで私を以て觀れば方々の國に「インフレーショニスト」の議論は大分あるのだから、何も珍しい議論でも何でも無いのでありますが、成程表面から言へば物價を引上げやうと云ふ議論では無い、詰り物價を下げる方法が異つて居ると云ふことに相違ない。併しながら何うすれば生産を奬勵する事が出來るかと云ふことが問題になる。生産を奬勵する、是は如何なる場合に於ても惡い事でも何でもありませぬ。甚だ結構な事である。それは物價が高くならうが、物價が安くならうが、どうならうとも自分の國の自然の富源を利用して行くと云ふことであるのだから、生産を奬勵して行くと云ふことに付いて、吾々が何も反對する理由は無いのであります。それは物價問題を離れても滿腔の贊意を表さなければならぬのであるが、之を物價問題として考へて見る

如何にして生産を奬勵するか、其生産を奬勵すると云ふ方法は恐らくは昨日の最後に申上げましたやうに、租税を輕くする、關税を引下げる、運賃を引下げると云ふやうなこと、或は又色々な經營の方法を改善する、又生産技術を發達させる、生産能率を高めて行くと云ふやうな事に依つて行くか、然らざれば生産を奬勵する方法と致しましては、其物の價を高くするより外に方法は無いと思ふ。詰り儲けがあればこそ生産をすると云ふことになつて來るのである。さうして見ると云ふと物を高くしないで生産を奬勵して行く、今列擧しましたやうな方法を講ずるだけで充分に生産が伸びて行けると云ふなら、何も吾々は之に對して異論は挾まないそれは爲さつて下さらなければならぬ事であるし、お辭儀をしても大聲叱呼しても、其種類の生産奬勵と云ふことはあるべきことである。それが爲に生産が盛んになるのは良い事であるに相違ない。假令それが看板ほど良く行かない迄も、半分だけ行くと云ふことだけでも決して害のあるべき事では無いのであるから、之に對して吾々がケチを付ける理由は些ともありませぬ。併しながら價格を高くすることに依つてと云ふと物價問題としては反對せざるを得ない。物價が高くして困つて居ると云ふのに、又物價を高くしやうと云ふことは、それは部分々々の事であるかも知れぬが、それではいけない。又生産を奬勵する方法として資金を潤澤ならしめると云ふことであらば、物價を高くする、價格を高くすると云ふことゝは稍、違ひますが、資金を潤澤にすると云ふことになれば、何うするのであるか、目下金融界がだぶついて居ると云ふことであれば知らぬ話であるが、さうで無くして資金を潤澤にすると云ふことならば、利子を引下げるとか何とか云ふことにして、通貨を膨脹させなければ、資金が潤澤にならないと思ふ。斯の如きものであつたならば、是は又物價が高くなつて來る。それであるからそんな事をしないで行く。是は明日申上げなければならぬ事であるが、財政上の方の色々な事柄に依つて物價が引下つて來る、資金を其方に繰廻すことが出來ると云ふやうな事が出來ればは何も物價には害は無い、寧ろ利益が有るのであるから、之に對しては贊成せざるを得ないのであります。併しながら資金を潤澤ならしむる爲に通貨を膨脹させると云ふことは、是は間違つた事であるに相違ない。又生産を奬勵するが爲に今列擧致しました事と違つて、例へば保護政策を行ふことになれば、是亦物價が高

くなつて行くと云ふことになりますから、成程物價を騰貴させた割合に較べて、生産を増加することが多くなれば、それは遠からずして良い結果を齎す事になるのであらうと思ひますけれども、其事にして期待する事が出來ない限りは、俄に贊成する事が出來ない議論であると私は言ひたい。「インフレーショニスト」の議論は良い議論でありますけれども、餘程危險が伴つて居る所のものであると云ふことを、日本の議論としてではない、世界の議論と致しましても反對する事が出來ると思ふのであります。それで先程も申しましたやうに此問題を取扱つて居る所の多數の者は、之に向つてやかましく反對をして居るのであります。勿論其論據などに於きましても、人に依つて大分違つて居るのであります。此議論に對して一生懸命になつて反對して居る所のものは、英吉利の本で申すならば、ニコルソンの「インフレーション」などである。其本などに於きましては頻に斯の如き議論に向つて反對說を唱へて居るやうであります。併しそれを細く申上げる事は省いて置きたいと思ひます。

第二節　通貨縮小による物價調節策

先づ私は今色々な議論をごた〳〵並べたのでありまして、甚だ要領を得ない譯ではありますが、根本の議論になりますると云ふと、爭つて居つて一致しないのであるから、俄に論斷することは出來ないのであるが、唯、時局問題として多數の人の見て居る所を綜合して見ますると、物價問題を解決して行くのは通貨を縮小させて行くのにあると云ふことが多數の議論のやうに思ふ。是が輿論である、通說であると思ふ。就ては少しうるさい樣では有りますけれども、其通貨を縮小させる方法に付いて、向ふの方面に於て言はれて居る議論を簡單に申上げて置きたいと思ふ。

一　金本位制度の回復

通貨を縮小させる方法は色々ありませうが、是非やらなければならない事柄は、歐羅巴諸國の如きは大部分金本位制度を打毀してしまつて居る、それであるから先程も繰返し繰返し申上げて居るやうに、金本位制度を回復しなければならない。

是が根本の縮小論である。さうすれば卽ち紙切であるからどつさり出して居る通貨を金本位制度になつてしまつて硬貨幣になつてしまふと勢ひそんなに紙幣が出て居るほど金はありはしないのでありますから、金本位制度を回復すると云ふことに致しますれば、信用に依つて若干の伸び縮みがあるにした所で、通貨は自ら縮小しなければならないのであるから、それで貨幣制度の基礎を固くすると云ふことが物價問題を解決する上に於て第一義でなければならない。又貨幣制度を回復することが出來たならば爲替問題も亦解決することが出來る。元の形になる――常調になつて、卽ち金に依つて國際貸借は決濟されると云ふことになるのでありますから、信用は回復して爲替相場が自ら元のやうな形になつて來る。それは多少の動搖はあるけれども、今日の如くに甚しい變動を見ないで濟んで行くのである。それであるから金本位制度と云ふものを切離して爲替相場の安定を得せしめると云ふことはむづかしい話である。左れば貨幣制度の基礎を固くすれば物價問題を解決する事も出來るだらうし、爲替問題をも解決する事が出來るし、さうなつて來れば又隨つて經濟の發達と云ふことの上にも少くない利益があるのである。だから困難ではある、實行上に於て幾多の難關はある、樂な事ではないことは分つて居るけれども、兎に角第一歩として金本位制度の回復と云ふことを心掛けて行かなければならないものである。その第一着手としては卽ち言ふ迄もない、一面に於ては金の保有高を增加して行くことの必要がある。勿論金本位制度を回復すると云ふ目的に出でゝ居るとのみ言ふことは出來ませぬが、諸國は一生懸命になつて金の保有高を增加する政策を行つて居ることは申上げる迄もない。それで大藏省で調べた所のものが公けになつて居るのでありますから、それ等に付いて御覽下されば充分に分る事であらうと思ひます。さうしなければ如何に金本位制度をすると言つたつて金が無ければどうにも仕樣がない。併しながら金があつた所で、それで今出て居る所の通貨をどうすれば宜いかと言へば、卽ち額面に於ては非常に高いものになつて居るかも知れぬけれども、多くの人の議論に依ると云ふと、それを引換へるより仕方がない。其引換へるに當つては、卽ち現在の時價特に爲替相場を基準として引換ゆるのである、そうすれば自然出て居る不換紙幣なら不換紙幣は少くなつてしまふと云ふことになる。それで

通貨を縮小する、さうして金卽ち正貨準備を多くすることを一生懸命にする。鋭意熱心にやつて行けば必ず金本位制度を回復することが出來る。又聽て通貨縮小と云ふことが出來るであらう。斯う云ふやうに言つて居るのであります。

二　財政緊縮

而してそれをやつて行かうと云ふのには、努めてやらなければならぬ事柄は、財政の緊縮と云ふことである。御承知の通り此戰爭に依つて財政は著しく膨脹した。又財政が著しく膨脹したと云ふことが通貨膨脹の可なり大きな原因であると云ふことも前々回に申上げた事であります。それであるから其點から言つても宜しくないが、又財政の負擔の加重と云ふことが生產を萎微せしめて居る、經濟界に於て害があると云ふことになるのでありますから、財政を緊縮させると云ふことがどうしても物價問題の解決の上に於て必要である。又經濟界を救濟して行く上に於て必要である。經濟社會をして常調に歸らしむると云ふことに於ては、財政の緊縮、是は是非やらなければならぬ。カッセルなども言つて居るやうに、それをやらうと云ふのには先づ手を下さなければならないことは軍備縮小である。財政膨脹の最大原因を爲して居る所のものは、軍備の擴張と云ふことである。軍事費の膨脹と云ふことが財政の膨脹と云ふことを來した上に於て最も大きな關係があるのであるからして、どうしても財政を緊縮させやうと云ふことになれば軍縮と云ふことになつて來なければならぬ。カッセルが言つて居るが如くに、恰も皆が此戰爭の方に力瘤を入れてゐる。方々の國が半ば戰爭のやうな狀態になつて居つたならば、如何にして財政の緊縮が出來得やうか、財政の緊縮が出來ないと云ふことになれば、金本位の回復も得られないだらうし、それから物價問題の解決も出來ないであらう。それであるから何を措いても財政を緊縮させると云ふことが必要でなければならない。斯う云ふことを言つて居りますが、此事に付きましても多數の學者は一致して居る所の事である。

三　公債非募集

第三の方法と致しましては公債を募集してはいけぬと云ふことであります。畢竟國家が公債を募集すると云ふことは、結局生產界に用ひられる資金を奪つて、不生產的の方に用ひると云ふことになるのである。それは物に依つては間接に

生産的に用ひられる場合も無いではない。無いではないかも知れぬが其の效果が出て來るのは或は十年二十年後に非ざれば出て來ないものである。それが不生産的に用ひられて居ると言つては語弊があるかも知れないけれども、それは經濟界が健全になつて餘裕がある場合に於て言ふべき事であつて、餘裕がなく卽ち直接に生産に關係して居る事すらも資金が缺乏して困つて居ると云ふやうな場合に當つて、方々の國が行ふたが如く、財政を行ふ上に於て公債を頻に募集することであつたならば、是もさう一概には言へない議論であるかも知れませぬけれども、併しながら大體の上から言へば直接に生産的に用ふる資金を少くする、それは先程の生産を增加すると云ふ議論から言つてもいけないのである。又一面から言ひましても、卽ち物價を引下げると云ふ方の議論から言つてもいけないであらうし、それから財政を緊縮させると云ふ議論から言つてもいけないのであるから、公債は募集しないと云ふ原則を取らなければならぬものであると云ふことは、是もブラッセルの財政會議などに於て多數の學者が一致して居る所の事である。財政緊縮と相俟つて多くの權威ある學者が承認して居る事である。唯、それだけを申上げて置く事に止めます。

四　金利引下

第四の事は是は向ふの事でありますが、世の中には隨分金利を引下げよと云ふ議論があるけれども、是は甚だ危險である。金利を引下げると云ふことになると、良い仕事も惡い仕事も興ると云ふことになつて、動もすると資金が兎角不確實なる事業の方に多く用ひられると云ふことになる。其の事が經濟社會に取つて決して喜ぶべき事柄では無い。のみならず、さうなつて來ると云ふと物價問題の解決などは出來ないことになる。それであるから金利を引下げるなどと云ふことは宜しくない。寧ろ金融は緊縮方針で暫くの間は進んで行かなければ、物價問題の解決は出來ない。又有らゆる問題を解決せしめることが出來ないと云ふことも、是も多くの通貨縮少論者の考の中に一致して居る所である。之を要するに通貨縮小、物價下落と云ふことは、結局方々の國の經濟社會をして、常の形に戻らしむる所の途である、之を措いて外に方法はないと云ふことに可なり多數の者は言つて居るやうであります。私共も大體に於て此議論に贊成をしたいと思ふのであ

ります。斯う云ふ建前に於て然らば我國の物價問題は如何と云ふことを、私の觀る所に從つて若干申上げて見たい。又之に關聯した所の問題に對する所の意見を申上げたいと思ひます。それは明日のお話に讓つて今日はこれだけで終りと致します。

第四章　我國の物價問題

一昨々日は物價問題の大體のお話を致しましたが一昨日は貨物を中心と致しました物價調節のことの極くざつとした事を申上げ昨日は通貨を中心と致しました物價調節の極く概略を申上げました。各國で通貨に對して行つて居ります數字等の事を申しますれば色々あるのでございますが、行き途は殆ど同じやうでありまして、昨日申上げました輪廓を辿つて居ると申して差支ないと思ひますから、是等のお話は總て省略致しまして、今日は極く簡單に我國の物價問題に付きまして愚見の一端を申上げて私のお話を終へたいと思ひます。

第一節　我國物價問題の現狀

我國の物價問題と申しましても實際の事になりますれば私は實際には疎いのでありまして、寧ろ皆樣の方がお詳しいのであります。その私の迂遠なる見解を申上げることは甚だ恐縮でありますが、併しながら諸國の行ひ來つた所、又諸國の多數の學者が考へたり論じたり致しました所に依つて得た知識を以て、我國の物價問題の經緯を觀察して見ると云ふことも強ち無益な事でもないかと思ひます、是も細かな事を申しますれば可なり多岐に渉ると思ひますから、其中二三の點を御話しすることだけに止めたいと思ひます。

我國に於て物價問題が喧しくなりましたのは、申す迄もなく矢張戰爭の結果であると思ひます。戰爭の餘波を受けまして我國の物價は統計等の示すが如くに著しく騰貴致しました。其騰貴した原因を辿つて見ますると、矢張戰爭に直接關係のある物が一番先に騰貴したやうであります。又交通が閉塞致しましたが爲に外國から輸入をすることが出來ないと云ふこと、又一面に於きましては東洋南

洋方面の市場に於ては、泰西諸國からの貨物が這入つて參らない爲に、我國生産品に對する需用を喚起致しまして、我國からの輸出が多くなつて來ました、此影響を受けて物價の騰貴致しましたことは、是も諄く申上げなくても皆樣の能く御承知の事である。それで輸出が增加し輸入が少なくなつたが爲に、戰前に於ては輸入超過でありましたものが、戰時になりましてから輸出超過に變りました。隨つて輸出超過の勢と及び色々な方面に於きまして貿易以外の國際貸借關係も我國に受取るべきものが多くなつて、之が爲に貿易と貿易以外の原因とに依りまして、外國から金銀等の輸入せられた額と云ふものは少なくない。隨つて通貨は著しく增加致しました。此通貨の增加に伴ひまして亦物價が著しく騰貴致しましたことは一々數字を申上げませんでも顯著なる事實でございます。併し行方に於きましては通貨の膨脹致しました諸國と我國の狀態とは稍々違つて居る所があるやうに思ひます。それは御承知の通り我國に於きまして輸出が盛になつて來た、隨つて此輸出を便利ならしむる爲には爲替資金等について大なる便益を與へました。之が結局は同じ事になるのでありますけれども、形の上に現れた所に於ては……戰爭中に於ては通貨の膨脹する上に於て一番顯著なる原因の樣に吾々からは見受けられるのでありますが、我國に於て物價が著しく騰貴し、又通貨が著しく增加致しましたのであります。斯の如き事を詳しく申上げる必要は無いのは、戰爭中よりも却て戰後に於てゞあると云ふことは注意しなければならぬ事柄であるやうに存じます。例外はございますけれども方々の國に於きましては、戰爭が起ると共に物價問題の甚だ重大であると云ふことを痛感致しまして、それで戰爭後に於きましても、力の許す限り事情の許す限り、物價調節を怠らなかつたのでありましたが、戰爭が終りますると共に出來るだけ所謂戰前の常態に戻さなければならぬと云ふことは政治家等の考を支配して居つたものと見えます、併し中々財政は膨脹して居りまするし、通貨は前に申上げたやうな混亂狀態に陷つて居るのでありまして、それで又物價も著しく騰貴して居ると云ふことでありますから、之を戰前の狀態に直すと云ふことは決して容易な事柄ではなかつたやうであります、併しながら一生懸命になつて物價の調節に力を盡した樣であります。物價の調節を致しますることが總てあらゆる經濟問題或は戰後の經營をやつて行

く上に於ての基礎であると云ふやうに考へて居つた者が多くあつたやうであります。それでありますから英吉利に於ても、又北米合衆國に於ても、鋭意熱心に此通貨の縮小又物價の調節を致したものでありますから、前にも申しましたやうに物價は大分下つて來た。それで一派の人々は是非とも戰前の狀態にまで引戻さなければならぬと云ふ位に、それを標的にして居つたのであるが、一派の人々はそれは無理であると云ふやうな議論があつたと云ふことも前に申上げましたから繰返しては申しませぬ。斯の如き事か議論になり、又一生懸命になつて是等のものが多くの人の討論の話題に上ると云ふ位にまで、此問題に付て熱心であつたと云ふことは、注意すべき事であると思ひます。然るに我國に於きましては物價問題は比較的に輕く見られて居つたのであります。それでありますから通貨の膨脹と云ふことも、統計に示す所に依りましても戰爭中よりは戰爭後に於て甚しくなつた。又財政の膨脹も戰爭後に於て甚しくなつて居る。隨て物價の騰貴した勢も却て戰後の方が一時ひどくあつた。それよりも稍〻戻りましたけれども、戰爭中よりも却て戰後に於て物價が騰貴すると云ふやうな有樣であります。數字等を申上げることは煩いから總て省略を致します。それで御承知の通り恐慌が起りました、併しながら如何にして恐慌が起つたか。私共の見る所に由りますと、即ち戰後に於ては必ず恐慌が來るものである、戰爭中に於ては工合が宜かつた方々の國が戰爭に從事して居るが爲に、餘力を東洋方面に用ゐることが出來なかつたから、貿易は振ひ國際貸借の關係は甚だ我に有利であつた。金の輸入或は我國の金の保有高は、著しく增加したと云ふやうなことでありまして、戰爭中は甚だ宜かつた。けれど必ずや其の反動は來るであらうと云ふことは誰も彼も考へた所であつたのであります。併しながら幸か不幸か存じませぬが、戰爭が終り平和が克復致しましてからも、其反動の來方が遲かつたので、戰時中に豫想してゐたことが起らなかつたのでありましたから我國の人心が或意味に於ては緊張して居つたものが、其緊張味を缺くやうになつたと云ひませうか、即ち恐慌來の如きものはそれは悲觀論者の考である。唯〻膨脹したから反動が來ると云ふことであるが必しも恐慌などが來ると云ふことに限りはしない。だから恐慌が來ないと云ふことであるならば、大に事業を擴張しなければならないと考へ出したのでありま

す。斯樣な事で事業は擴張されたし、又事業の擴張を慫慂したのであるし、色々の方面に於て所謂積極的方針に進んで行つた譯であります。併しながらそれが爲であるか、或は戰爭の時に既に恐慌來があるべき原因があつたのであるか、その來方が遲かつたのであるか、そこの所は分りませぬけれども、兎に角御承知の通り恐慌は來たのであります。それか爲に一般に甚だ困つたのであります。是も出來るだけ彌縫策を講ずると云ふことでありまして、其意味に於て若干は整理に付いて居るのでありませうが、今日に至りますまで當時の創痍は充分に癒つて居らぬやうに考へられるのであります。それで又一面に於きましては戰爭中或は戰後に於ては消費が增加しました、惡く申しますれば贅澤になつたのであります、それが急には前の狀態に戻つては來ませぬ。色々な人が節約の議論をするのでありますけれども、之に耳を藉す者は少ない有樣である事は御承知の通りであります。それで一方に於きましては通貨縮小の論も起つて居ります。或は又財政緊縮と云ふ聲もあります。或は色々な整理其他消極的の議論もあるのでありまして、又政治家も其事に注意しない譯ではありませぬけれども、大勢の赴く所中々それを行ふと云ふことは出來なくなつて、今日に至つたものであると申して宜しいと思ふ。これは詳しく申上げなくても皆樣の方がお詳しい話であります。斯る有樣であつた結果今日の樣な狀態にまで持來してしまつたのであります。

第二節　我國經濟の現狀

一、輸入超過の現狀

それで我國の經濟は目下甚だ不況の狀態にありますが其原因は、私を以て之を見れば主として輸入超過にあると思ふのであります。是も一番初めに申上げた事でありますが、輸入超過の勢は御承知の通り段々多くなつて來て居るのである。昨年の如きは言ふ迄もない話でありますが五億三四千萬圓の輸入超過を見ると云ふやうな有樣であり、本年とても前半季に於きまして數億圓の輸入超過を見て居ると云ふやうな有樣であります。併しながら物價は可なり高い、然るに經濟界は却て振はない、不況である。元來經濟界が振はないと云ふ事は物價が安い時に起る現象である。物價が安い時は經濟界の不況が起ると云ふことは經濟學の教

科書に書いてある所でありますが、我國の如きは物價は高くあるのに拘らず經濟界が甚だ不況であると云ふことは詰り前にも申しましたやうに我國の外國貿易が振はない。外國輸出が盛んになつたならば我國の經濟界は蘇生するのである。併しながら我國の市場は狹いものであるから、輸入超過の勢の爲に一面に於ては我國の產業は外國に壓倒せられて、伸びることが出來ない。消費の相當の割合が內國品を離れて外國品の方に走つて行く、之が又生產が振はない原因になつてゐる。又一面に於きましては我國の生產能率を上げて廉價に生產しやうと云ふのには、可なり大規模にしなければならぬ。大規模にするのには何うしても一部分は之を海外に輸出しなければならない。然るに輸出の方は出來にくくなつて居る。輸出貿易は僅に生絲に其命脈を繫いで居ると云ふ位のものである。生絲貿易が輸出額の四割を占めて居ると云ふやうな狀態である。それ故もし生絲の輸出が無かつたならば輸出額が遙に減つてしまつて、輸入超過の勢ひが益〻甚しくなると云ふ譯である。考へて見れば實に情けない話、成程震災前に於きましては東京の商業會議所等が節約「デー」なんど云ふものを拵へて、頻に消費の節約の宣傳をされた。考へて見れば甚だ妙な事である。吾々のやうな者が消費節約の宣傳等をやると云ふならば分つて居るのでありますが、商業會議所と云ふものは生產者或は賣る方の人の利益を代表して居る方のお集りである。言葉を換へて言へば多く賣らなければならぬ方の方であるのに、それが買ふなと云ふ宣傳をされるのであるから、考へて見れば餘程狂つて居ると申さなければならぬ。皮肉に申しますれば、それは節約「デー」なんどと云ふものを拵へて、其日買はないで他の日に買へと云ふのであると言つてしまへば實も蓋もない話でありますが、眞逆さうではありますまい。賣る方の人がお客樣に向つて買ふなと云ふ宣傳をなさる事は、其れがどれだけの效果があるかを知りませぬが、取も直さず消費を節約し消費を減少したならば物價が安くなるであらうといふのでありませう而して物價が安くならなければ輸出貿易が振つて來ない、詰り算盤を採つて見れば國內では賣れないでも、物價が下りさへすれば海外へ賣れるから、其方が結局利益である、此打算から來て居る宣傳であると解釋するのが當つて居ると思ふ。成程需要を減じて消費を抑へ付けると云ふ事も、物價を調節する所の一方法であるには相違ありませ

ぬ。併しながら上來述べて來た如くに、其效果がどの位あるか、私はそれ程顯著なるものであるとは思はないのでありますけれとも、一方法であると云ふ事だけは疑ひ無い。隨つて斯の如き議論に依つて消費節約宣傳などが起つた事であらうと推察致します。問違つて居るかどうかは分りませぬ。さうして見ると日本が物價騰貴に苦んで居る事は言ふ迄もないのであります。

二、國際貸借の現狀

それに加へて御案内の通り國際貸借關係も餘り良くなくなつて來た。是も細かい事は分らないのでありますが。新聞等の敎へて呉れる所に依りますと、大正七年頃に於きましては請取勘定が、一年に五億七千萬圓位になつて居つたと云ふことでありますが、是が大分減つてしまひまして、大正十年には一億四千萬圓、大正十一年或は十二年に於きましては一億五千萬圓になつて居ると云ふ樣な計算を致して居る者かございます、或者は一億前後位のものであると云ふ計算を立てゝ居る。はつきりしたことは分らないのでありますが、兎に角多い計算に依つても一億數千萬、少い計算に依りましても一億圓位のものであると思ひます。一方に於きまして輸入超過の勢が十年の三億六千萬圓、十一年の二億五千萬圓、十二年の五億三千九百萬圓と云ふやうな大きな數は、迚も償ふことは出來ないのであります。其結果は如何になつて參つたかと言ひますれば、申す迄もない外國に持つた金の保有額が段々減つてしまつたので、我國の在外資金は御案内の通り大分手薄になつてしまつたのであると云ふことが言へるのであります。併しながら金の輸出を禁じて居ります結果と致しまして、内國の金の保有額は未だ十數億圓である。さう云ふやうな次第でありますから、此勢で行つたならば前途は如何なるのであるか。俄に見据を付けることは困難な有樣でありますから、何人が考へました所で、我國の爲替相場が大に下落して來ると云ふことは當然な事と言はざるを得ないのでありまして。別に不思議の事ではないと思ふのであります。爲替相場の下落であるとか、或は輸入超過がひどくなるとか云ふやうなことは物に譬へて申しますれば、詰り吾々が病氣でも致しました時に、熱が出るとか寒氣がするとか云ふことと同じ事でありまして、吾々の身體が健康になり病氣が癒りさへしたならば、斯の如き狀態は無くなつてしまふ譯である。それでありますから吾々に

病氣がある爲に熱が出て居るのであるから、是は何人が考へましても當然なことで、或はそれは四十弗になるのが、適當であるか、四十一弗或は三十九弗になるのが適當であるか、そこの所は、はつきり分らぬかも知れませぬけれども、兎に角爲替相場は下落して、來なければおかしいので下落して來るのが當り前の事であると思ふのであります。隨つて此問題が御承知の通り起つて參りました。

第三節　爲替問題と金輸出解禁

一、爲替問題と解禁論

私は此問題に付いて一言したいと思ふ。卽ち爲替相場の逆勢を直すのに一番容易い方法は何であるかと云へば、金の輸出の禁を解くと云ふ事である、我國は正貨を持つて居るのであるから、卽ち金輸出の禁を解けば必ず之に依つて爲替相場は上つて參りまして、或は平價にまでなると考へられるのであります。隨つて色々な方面に於きまして金の輸出の禁を解くべしと云ふ所謂解禁論が盛に唱へられて居る樣であります。

（一）「爲替相場の下落は經濟上有害なり」との說

所で私の眼に觸れました所の議論を竝べて見ますると凡そ三つに分類することが出來るやうに思ふ。其一つの論旨は爲替相場が下落すると云ふことは經濟上有害の事である、それであるから一番容易な方法である金の輸出を解禁して平價に回復せしめなければならぬ。斯う云ふことは誰も考へる所であつて、先づ普通の考方である。併しながら其經濟上有害であると云ふ議論の論旨の中に自ら二つあるやうに思ふ。卽ち爲替相場の不安定は益貿易を不振ならしめるから有害であつて、之を救濟しなければならぬと云ふやうに考へて居られる方と、又一方に於ては爲替相場の下落と云ふことは、詰り其國の信用を傷けて居るものであるから、色々な事をする上に於て有害である、故に救濟しなければならぬ、斯う云ふ考で議論されて居る方とがあるやうである。

（二）通貨縮小論としての解禁論

又第二の論旨と致しましては、是は吾々の今迄やり來つた問題に關係がある。卽ち通貨縮小論としての解禁、卽ち通貨が多いのであるから輸出の禁を解いてし

まへば、必ずや我國の正貨は出て行く、正貨が出て行けば通貨は縮小する、通貨が縮小すれば物價は下る、卽ち物價問題の解決にもなるし、又外國貿易の振興にもなる。此方法として金の輸出の禁を解かなければならぬと云ふのが、申さば、通貨縮小論としての解禁論であらうと思ひます。是も可なりの人に依つて頻に唱へられて居る議論であります。

（三）自由放任說

又第三の議論は元來經濟上の活動は、自由に放任して置かなければならぬ。然るに人爲的に之に障碍を與へ。それに依つて色々な故障を起さしむると云ふことは面白くないことである。是は自由放任が宜い。金の解禁をしてしまつて、當業者をして其好む所に從つて活動することが出來るやうにするのが宜しい。斯う云ふ議論の樣に見えます。私の拜見しました議論は說き方は不十分であるかも知れませぬが、今申したやうに分類することが出來るのであります。

二、我國の現狀と解禁私論

併しながら私をして言はしむれば、此自由放任論としての解禁論、是は經濟界が健全なる狀態に於てなれば、成るたけ自由放任が宜いことは其通りである。併しながら私を以て見れば我國の經濟界は今重病である、病氣が重い、中々油斷がならないやうに思ふのでありますから、常道論で之に當ると云ふことは如何なものであらうかと思ふのであります。故に此點につき深く議論する程の値打はないものだと思ふのであります。又第一の議論の中に於きましても、爲替相場の下落して行くと云ふことは我國の信用を害するからいけない、と云ふことは、是は向ふの方から見ますれば、假令爲替相場を回復して見た所で我國の經濟狀態が今日の如きものであつたならば、果して信用を回復することが出來るや否や、是も疑はしいと思ふ。又解禁をすると云ふことに依つて爲替相場が戻ると致しました所で、それが信用を維持する上に於てどれだけの效果があるかと云ふことに付いては窃に疑ふのである。此點も私は大に議論しなくても宜いものだらうと思ひます。殘る二點に付いて申上げて見たい。私の本問題に對する答は間違つて居るか居らぬか知らぬが、私は解禁すべきもので無いと言ひたい、併しながら絕對的に解禁しないと云ふよりは、今政府等がやつて居るが如くに、必要な物の輸入に對しての

み出來得る限り正貨の拂下をやると云ふ位のことで行くのが、一番實際に當つて取るべき策ではなからうか、又他の言葉で申しまするならば、爲替相場は無暗に下つて行かれては甚だ困るのであるが、併しながら今日位下つて居る所で爲替相場を安定させたい、何も之を回復してしまつて平價にまで引戻す努力をしなければならないと云ふ理由は無いといふのが私の議論であります。それではどう云ふ所からさう云ふやうな要領を得ない生溫るい議論に到達したかと云ひますると、先づ外國貿易の上から考へて見ると、成程外國爲替相場が平價になつて居る方が、平價にならぬより宜いに極つて居る。併しながら爲替相場が平價になるにあらざれば貿易を爲すことが困難であると云ふものでは無い。安定さへして居れば宜いと思ふ。始終動けば輸入をする方に於ても、又輸出をする方に於ても、貿易に關係さるゝ人は算盤を採ることが困難であるから不利益であると云ふことは分つて居ります。併しながら安定さへして居つたならば我國の貨幣の價値、所謂對外價値が低いと云ふことは貿易をする上に於て何も害が無いことだらうと思ふ。否々我國の貨幣の價値が下落して居ると云ふことは、輸出を促進する上に於て便利である。輸入を阻止する上に於て力があるのであるから、爲替相場が下つて居ると云ふことは却て貿易の逆調を止めて行くと云ふ上に於て有利なのであるから、何も四十弗を、四十九弗迄持上げなければならぬと云ふ理窟は無いではなからうか。此建前から言ひますると四十弗が宜いか、四十一弗が宜いか、三十九弗が宜いか、そこの所は私には分らぬのでありますが、兎に角安定する事が必要なのでありますから爲替相場が安定しなくてどん〳〵下つて行くては甚だ困るから政府などが相當に心配して下さつて、四十弗なら四十弗より下らぬと云ふやうな事にする必要はありませう。或は其時に於ては金の輸出を事實上盛にして、さうしてその相場より下らぬやうにする。斯う云ふやうにして戴かなければならぬと思ひます。それはやつて戴くことを希望する。謂はば甚だ緩くり行かうと云ふのであり或意味に於ては金の輸出を出來るだけ引延してゆつくり行かうと云ふのでありまます。卽ち爲替相場は安定さへすれば宜しい、平價に戻さなくても宜い、否貿易の方から言へば却て平價に戻さない方が利益であると云ふのが吾々の考であります。其の當否は御批判を仰がなければならぬが、私はさう云ふやうな考を持つて

居る。又多くの方の御議論のやうに、通貨を縮小する上に於てはどうしても金の輸出を解いてしまはなければならぬと云ふことは私共は物價を引下げやうと希望して居る一人であるから、直に其議論に贊成を致さなければならぬ立場に居るやうでありますが、併しながら考へて見まするとそれはもつと我國の經濟界が健全であつて呉れゝば直に贊成するのでありますが、大分病氣が重くなつて居るやうであるから、又第二の新しい心配を持來したのである。其の心配とは何であるかと云ふと我國の兌換制度を維持する上に於て差支の無いものであるか何うかと云ふ心配であります。それも勿論豫測でありまして吾々の想像しきれないことであります、唯と一場の私の考として御聽きを願ひますが、私の考の經路から申しますと成程我國には金の保有高は相當にある。併しそんなにどつさり持つて居る必要は無いのであるから、金が出て行つても、今是だけあるものを虎の子のやうにして少しも離さないと云ふ必要の無いことは何人も御異論は無からうと思ふ。併しながら金輸出の禁を解いてしまつて勝手に輸出をする、卽ち爲替相場を平價にする迄輸出するとなると其輸出が如何なる程度で止まるか、是も或方の御觀察に據りますと四億も出れば大概平價に戻るだらうと云ふて居る方もあるし或は、五億位出て行つたら平價になるであらうと云ふやうに觀察して居らる方もあるやうである。是は如何なる根據に依つて居るのであるか私は分りませぬが、其位で止まるならば、私は金の輸出解禁と云ふべきものはやるべきものだと思ひます。併しながら果して其位で止まるものであるや否やと云ふことが甚だ疑はしい。假に平價になることが四億五億の金で出來るものであるとしましても、我國の外國貿易の狀勢か今日の如く輸入超過の勢が甚しくあつたならば、金の輸出は決して之に止まらないと云ふことになるに相違ない。さうなりましたならば……私の觀察は甚だ悲觀的でありますけれども……さうなつて參りましたならば果して兌換制度を維持する上に於て、困難を感じないであらうかどうであらうか、ケンメラー教授の言つて居る所に據りますと、英吉利等に於きましては凡そ通貨に對して準備が四割餘位ありさへすれば澤山であると云ふことでありますから、其の割合を我國にも當箝ることが出來るなら、例へば十億圓の通貨に對して四億圓だけの正貨準備があればそれで差支がない譯であると云ふことに

なるのでありますが、併しながら貿易の狀勢が其間に直つて呉れば議論はございませぬが、さうでないと云ふことになると、どうしても兌換制度の基礎が危くなるではなからうか、此點が私共の甚だ懸念に堪えぬ所であります。尤も私の一片の杞憂に過ぎなければ甚だ幸福であります。そんなことは杞憂である、兌換制度が動搖などすることはありはしないと云ふ議論もあります。それが本當であれば私の議論はすつかり崩れてしまふのである。でありますが、どうも其處の所は心配するなと言はれても私は心配であると云ふのであります。其觀察の當つて居る居らぬは別な事でありますが此事を他の言葉で表すならば、詰り平價に戻した、爲替相場は回復した、病氣は癒つた、熱は下つた、其方はやれ〳〵嬉しやと思つても、今度は腸胃が惡くなつた、通じが惡くなつてお陀佛だ、斯う云ふ事になつてしまつては、是は丁度病氣は癒つたが死んでしまつたと云ふことになるので、甚だ困るのであります。そんな事は無いと云ふなら、それは無いと言ふお醫者さんの方が確かかも知れぬ。けれどもさう云ふ心配があると云ふだけは申述べたい。或は又當局者などになりますれば、さう云ふやうな心配もお感じになることであらうと思はれるのであります。それで昨日も申述べました如くに、ベンデクセンやなにかの議論のやうに、兌換制度は壞してしまつて宜いではないか、卽ち不換紙幣國になつたつて宜いぢやないか、そんなことは何も心配するに及ばぬぢやないかと云ふ議論が正しいものであるならば、是れ亦私の心配は何も無くなつてしまふのであります。併しながら昨日も申述べました如くに方々の國は壞れて居る金本位制度を回復し、兌換制度を回復すると云ふことは、經濟界を良くして行く上に於て急務中の急務であると考へて居る者が多いのに、我國ではまだ兌換制度を壞しては居ない、其兌換制度の壞れて居ないものを、兌換制度を壞すやうに引張つて行くと云ふことは寧ろ避けたいと云ふのが私の考であります。それでありますから私の考を詰めて申上げますれば、爲替相場の下落することが今日のやうにならぬ時期に於て、回復を圖ると云ふ話ならば金の輸出を解禁して居つた方が宜い。併しながら今日のやうな所まで來た以上は解禁することが危險だ、だからゆつくり行かう、ゆつくり行かうと云ふ事は詰り禁を解かずに置いて、それで政府當局者の考で必要だけのものは拂下げて、卽ち極く限定せられたる範圍内に於て禁を解い

て居る際なんだから、其程度に於てやつて行つて、或は三年で金が無くなつてしまふものなら、之を七年に延し十年に延すと云ふ方針を取つて、其間に我國の經濟界を回復させれば、此難局を突破することが出來るではなからうか。急激に之をやると云ふのが病氣を癒す方法であると云ふのも見方でありますけれども、それは重態になつて居るのだから、只今の所では荒療治過ぎはしないか。それであるから私から言へば卽ち解禁は尙早ではないので、遲過ぎたのであると云ふことに考へて居る。果して私の考が善いか惡いかそこは分りませぬ。

第四節　物價問題の解決策

一、我國の物價問題とその原因

「所で我國の兌換制度を破壞しないやうに力めて置いて、さうして我國の經濟界を今日の窮境から救出して行く途如何。卽ち物價問題を解決するにあり。」詰り私の見る所では我國の經濟界が今日の窮境に至つたのは、海外貿易が逆勢であると云ふことが最大原因である、故に之を癒す工夫より他に途はない。そこで暫くの間兌換制度を維持して行くことが出來るやうにして置いて、其間に吾々が一生懸命になつて外國貿易の逆勢を轉換するやうに努力する。」それが出來るか出來ぬかと云ふことが卽ち我國の經濟界が戻るか戻らぬかと云ふことの岐れ目である。此意味に於きまして物價問題と云ふものが甚だ重大なる意義を持つて來ると考へるのであります。詰り先程も申上げたやうに、物價が高くなつて居つて而も事業界が振はない、それで非常に困つて居る。經濟學の普通の敎科書にはさう書いて無い。物價が下るから經濟界が振はない、物價が高くなつて行くから經濟界が振ふのである。所が日本の今日の有樣は物價は相當に高い。此前申上げたやうに我國よりも高い處があるけれども、併しながら他の國よりも割合に高くなつて居つて經濟界が振はないと云ふ事は煎じ詰めて見ると、生產界、事業界の方に於て資金が缺乏して生產が仕惡くなつて居る。さうして、さうでない方面に於て色々な金が出て居る、それであるから通貨が相當に多くなつて居る。」言葉を換へて言へば、所謂資金と云ひますか資本と云ひますか、其れを如何にしたならば、不生產的の方面から生產的の方面に移すことが出來るかと云ふことが我國の今日の

場合に於ける一番の問題である。金が不生産界の方から生産界の方に這入つて行くと云ふことになりましたならば、生産が起つて來て、物價は低落すると云ふことにもなりませう。又不生産的の需要が減少すると云ふことになつて、物價は安くなつて來る。物價が安くなつて來れば、外國貿易の逆勢も轉じて段々順調に復して來る。煎じ詰めて見れば通貨縮小論の理由のある所は、此處でなければならぬかと思ふのであります。唯〻物價を引下げると言つた所で、又物價を引下げる方法と云ふことを考へろと言つた所で、或は通貨を縮小すると言つた所で何うします。利子歩合を高めると云ふことは誰でも考へることでありますが、成程利子歩合を引上げたら或意味に於ては通貨を縮小する、それが爲に善い所もある代りに又事業界などが相當に困つて居る所へ、更に又困らせると云ふやうな事になるのであります。其方は虐めないで置いて、さうでない方を虐めて行かう、斯う云ふ事に議論はどうしてもなつて行かなければならない。それでありますから私共は只今の所に於きまして利子歩合を高めると云ふ議論にも贊成し兼ねるのである。又生産界、事業界を助ける爲に、もつと通貨を出せと云ふ議論も、是も昨日も申上げたやうに贊成し兼ねる。それが爲には日本銀行の正貨準備制度と云ふものが、何年かの前の標準に依つて出來て居る所のものであつて、卽ち一億二千萬圓は少なきに過ぎる、之をもつと殖して三億萬圓にするが宜しいとか、或は遠慮して二億萬圓にするが宜しいと云ふ議論なども聞えて居るのでありますが、さうなさるとした所で、其金が皆生産界の方に這入つて呉れゝば或は害は無いかも知れないが、若しさうでない方に行つたならば、今でさへ生産界の方が貧血して不生産界の方が充血して居るのであるに、其充血して居る方に又行くと云ふことになれば愈〻以て物價は高くなる、それで産業界が振ふかと云へば却て振はないと云ふやうな結果になるではないか、是も想像でありますから、さう云ふ事をやつたときに果してどう云ふ樣になるか、そこの所は分らないのでありますが、さうなつて來ると私共の頭に上つて來る所のものは、煎じ詰めて見れば資金を不生産的の方面より生産的の方面に移して行く工夫を考へる、是も一時に移して行く譯には行かないから順に行くと云ふ事より外にどうも途がない。之が出來るかどうか、それはむづかしい話であるが議論はさうであらうと思ふ。

二、物價問題の解決策

(一)　財政緊縮を斷行せよ

然らば其途如何と云ふことになりますれば、昨日も申述べましたやうに、どうしても不生産的需要の親玉は財政であると云ふことが分つて來るのであるから、財政緊縮と云ふことの議論はどうしても出て來なければならぬ。議論は容易いですが實行はむづかしい。併しながら當然の論理を辿つて行けば其處に落ちて行かなければならぬことであらうと思ふ。我國の財政は私が申上ぐる迄もない、戰爭中に於きましては御承知の通り十億圓前後であつたのであります。それが段々に殖えて十一億になり十二億になり十五億になり、斯う云ふやうに極く近頃になつて我國の歳出は膨脹したのであります。其膨脹をしたと云ふことには物價騰貴も與つて力はありませう。併しながら又色々な事業、惡く申せば不急の事業が多く企てられて、さうして財政が膨脹したと云ふことを申上げても大した間違ひはないと思ひます。ですから更に當局者にお願をしなければならぬ。卽ち財政整理を斷行して戴きたい。是はもう議論としては財政を膨脹しやうなんと云ふことを施政の方針に仰しやつた大藏大臣はありはしないから、皆財政を整理する、行政を整理する、綱紀を肅正すると云ふことは、もう紋切形でありますから、其お考でおありになることは充分了解して居るのであります。併しながら前に申上げましたやうに、行政の整理とか通貨の縮小とか云ふやうなことは人氣の方から言へば甚だ惡い仕事である。私の解釋するやうにしたならば、財政整理と云ふことは必ずしも消極論ではないので、或る意味に於ては消極論であるが、或る意味に於ては積極論であると思ふ。卽ち財政の整理と云ふことが或る程度まで出來るとすれば、それが爲に從來財政方面に用ひられた資金が生産界の方に向いて來ると云ふことになつて行けば、生産界からは積極論である。且つ租稅其他の負擔が輕くなつて行くと云ふことになれば、經濟界は振つて行くことになるのであるから、それから考へても亦積極論と云ふことも言へるのである。故に經濟社會の方からも財政整理を援助して戴かなければならぬ、私はそれが大きな問題であると思ふ。御案内の通り方々の國に於ては手を著けて相當の成績を擧げて居るのである。英吉利に於きましても財政整理を斷行したのである、それで相當の成績を

擧げて居る、三分の一位は減少することが出來た。伊太利に於きましても財政整理をやつて、相當の成績が上りつゝあると云ふことである。さうして見れば方々の國の政治家が考へて居る所の事もさうであるのであるから、之を措いては他に方法は無いと思ふのであります。所で此財政を整理して行くと云ふことになると、大暗礁は言ふ迄もない陸海軍に相當の斧鉞を加へると云ふことでなければならぬ。之がどうも財政整理案の暗礁であることは疑ひない。こんな事は唯〻私などの書生論でありますが、我國の現狀は財政が困て居るし、經濟も行詰つて居るし、國民も困つて居るのだから、暫くの間どうせ戰爭は出來はしない。戰爭が出來ぬと云ふことならば拳骨ばかりが大きくつたつて仕樣がない。さうすれば拳骨は小くしたつて宜ささうである。亞米利加に馬鹿にされたり何かしたつて振廻すことが出來ない拳骨なら、もう少し小くしたつて澤山である。それは書生の議論で叱られることになるかも知れませぬけれども、直に軍縮論をやつて行くと云ふと、中々向ふでも意地になる。國防を如何と云ふ議論が出て來るのであるから、中々通りませぬ。けれども之を通さなければ、どうしたつて財政整理は出來ないのであります。私共から言へば十三四億のものなら十億前後位まで財政を引締めて貰ふとが出來れば結構であると思ふ。それは物價も戰爭後違つて居り、官吏の俸給も違つて居り、色々な事が違つて居るから一樣では無いけれども、之を行つて行かうと云ふには、面倒臭い事をやらずに、何か大藏大臣にでもなつた樣な事を言ふやうでありますけれども、どうも天引論で行くより外仕方がないだらうと思ふ。二割減なら二割減で天引論で行く。何とか彼とか言出したら、此も必要だと云ふことになる、固より必要ならざる事を今迄やつて居る譯は無いのですから、之が不急であると言つても、不急でないと云ふ理窟は幾らでも捏ねられるのだから、それをやつてゐたら、議論倒れになつてしまふ、やれるかやれぬか分らぬが、天引論が一番簡單明瞭であるやうに思ふ。併しながら是は餘計な話で、當局になつた樣な事を申して恐縮でありますが、此際當局者に御願ひしたいのは是非何とかして財政整理をやつて戴かなければならぬ。詰り不生産の方面から生産の方面に色々な物を持つて參る。それで息を繼がせると云ふことが今日の場合、物價問題を解決する唯一の方法である。

（二）公債非募集を實行せよ

それに財政上から言ひますれば―是は他の國の議論でありますが―公債を募集しない、是は議論する迄もないことだと思ひます。詰り今の議論から言へば明かなことで公債を募集すると云ふことの主なる議論と云ふものは、まさか經常の仕事を公債で支辨して行くのではないので、色々な事業を擴張するが爲に、金が無いから仕方なしに公債を募集してやらうと、斯う云ふ段取りになつて行くのであるから、さうして見ると、どうしたつて公債募集は今直接必要ではない。もうぎりぎり結著、是はどうしても仕方がない、併しながら其他、直に不急と云ふては語弊があるかも知れぬが、幾らか繰延べることの出來るものは、健康がもう少し回復する迄繰延べる。重態の病人にそんな事はさせない方が本當であるから出來るだけ繰延を斷行して貰はなければならぬ。是も關係者から言へば色々な議論が出て來る―どれが不急であるどれが不急でないと云ふ議論などが出て來るのでありますが―公債を募集しないと云ふ程度に、或は公債を募集すると云ふならば、それは政府なにかの關係しない程度に於て出來るか出來ぬか、政府の方から云へば募集しないと云ふことの方針で進んで戴きたい。さうして生産界から金を取上げない工夫をして戴きたい。さうしますれば結局通貨は膨脹したくも膨脹出來ないと云ふことになるのでありますから、通貨縮小と云ふ方面から言つたつて、積極的に通貨を縮小させると云ふことは困難であるかも知れぬが、消極的に通貨を膨脹させない、徐々に通貨を縮小して行くと云ふことにやつて行くには、公債非募集といふ主義を貫いて貰はなければいけぬものだと云ふことを言はざるを得ない。

（三）國産奬勵の必要

是は物價問題から考へて行つてさうなつて行くのであります。それは財政方面に付いて政府の方にお願をする事である。それから國民の方に對してお願をしなければならぬ事も幾らもある。私は其效果が何の位あるかは知りませぬが、此頃は亞米利加なんかに虐められてそんな議論も起つて來て居る樣であります、矢張り國産奬勵論と云ふものは起つて宜いものであらうと思ふのであります。即ち今の問題は外國貿易が逆勢である、輸入が多い。是も一番先きに申上げて居るが如くに、何も排外的の議論をする譯では無いが、併しながら輸入の内容に這入

つて見れば、もつと儉約をして輸入を減少することが出來る樣な程度の物、內國品に依つて間に合はすことが出來るやうな物が可なりある。それで一つは御承知の通り國產奬勵論が相當にやかましく言はれて居る。是は常道論としては間違が無い事だと思ふ。併しながら之が餘りに極端な事になつては、却て害があつて益がないと云ふことにならうかと思ひます。併し國民の頭に外國品の方が宜い、內國品などは用ゐなくても宜いんだと云ふやうな考が漲つて居ると云ふことは、一面から言へば輸入を盛ならしむる原因にもなるし、又一面から言へば我國の產業を振起させないと云ふ原因になるのであります。勿論價格問題にも關係あることで、價格をうんと安くすることが出來れば、そんな宣傳をしないでも、外國品に對する需要が內國品の方に移つて行くやうになるのでありませう。併しながら國產奬勵論は大體論としては然るべきものだと思ふ。斯く申せばとて何も外國品を絕對に買ふなと云ふそんな極端な議論をしやうと云ふのではない。一派の連中と一緒になつて米貨排斥運動の提燈持をしやうと云ふ譯ではありませぬ。あれこそ危い事だと思ふ。米貨を排斥することが出來たと致しましても、それは考へものであります。向ふから這入つて來る物よりは、日本から亞米利加への輸出の方が今日と雖も多いのでありますから、さうすると今度は向ふから排斥を喰つて、生意氣の事をしやがつたと言つて、今度は人間を虐めるのではなく品物を虐めると云ふ報復手段を取られる。さうすると又輸出が少なくなる、面白半分に他の國でも眞似をされたりすると、愈〻我國の輸出貿易は振はなくなつて來ると云ふことになるのでありますから、此方法は私共が提燈持をする譯にはいかないのであります。併しながらさう云ふ程度でなくて、國產奬勵と云ふ方の考がもつと漲つて然るべきことゝ思ふ。それは效果があるかどうか分りませぬ。唯〻考の持つて行きどころが經濟は世界的なり、經濟に國境は無いと云ふことは常道であらうと思ひますけれども、併しながら我國の狀態と云ふものは今輸入超過で困つて居る、さうして兌換制度が危いと云ふやうな狀態に迄なつて居るのでありますから、さうすれば權道的の議論も此際必要ではなからうかと思ふ。是は特に當業者に向つてお考を煩はさなければならぬ大きな問題になるのでありますが、何も此際ばかり必要の事ではないが、詰り生產費を何とかして少なくすると云ふことの

お考を運らして戴きたい。之が結局物價を引下げると云ふことにもなるし、それから輸出を盛ならしむると云ふことにもなるし、輸入を少なくすると云ふことにもなる。生産費を節約すると云ふ事に付いては、前にも申しましたやうに政府の方で行ひ得べき若干の施設もある、是も適宜考へて戴かなければならぬことは言ふ迄もない事である。當業者の方から考へましても、今日は色々の事業を經營して居らるゝ所が所謂能率と云ふ立場から見て完全無缺であると云ふことが言へるか、私はさうで無からうと思ふ。組織の上に於きましても其他の點に就きましても、能率論から申しますれば大に改善すべき點が多々あらうと思ひます。併しながら是もむづかしい話である。けれども政府に要望するに當つて、財政を縮少して貰ひたいといふのは唯一歳出入を少なくして呉れと望む譯ではない。詰り能率を擧げて貰ひたいと云ふことになるのですから、唯一政府ばかり責めて置いて、民間の事業家の方は己の方は知らぬと言ふて濟ます義理のものでは無からう。それも一々具體的の問題として考へて行けば、色々の問題が出て來るのでありますが、どうも能率の方面から見れば甚だ遺憾の事が多いやうに思ふ。それは事業の經營につきましても色々あると思ひます。又更に此頃に於ては若干さう云ふ問題も起り、又さう云ふ傾向はあるのであります。即ち小さな事業が分立して居るよりは之を聯合なり合同なり一緒になつて能率を擧げて行く傾向があります、是は矢張生産費を節減し得る一つの方法であることは疑を容れないのであります。又一面に於きましては色々な經濟機關の聯絡と云ふやうな事に付きましても、是れ亦考へて見れば幾多の問題があると思ふのであります。是等の事は私も若干は前に述べたこともありますし、又問題が物價問題から離れるのでありますから、茲に申述べやうと云ふ譯ではありませぬ。併しながら私の希望して止まざる所は、何とかして生産費をもつと安くして戴くと云ふことに付ての考であります。それが出來ると云ふことは詰り當業者諸君の利益であるばかりでなく、廣く考へて見れば我國全體の利益になるのであるし、又目の前に顯はれてゐる大きな問題、即ち我國の經濟界が不況であつて、此難關を如何にして突破すべきかと云ふことの問題を解決する上に於ても、與つて少からざる效がある事と思ひます。段々考へて行きますれば甚だ抽象的の事を申上げて相濟まぬのでありますが、詰

り物價問題の解決は、以上申上げたやうな事項が主なる事であると思ひます。

それで是は我國の事でありますが、私の見る所はさう云ふやうに考へるのであります。それで是等の事を一々細かに申上げて居る遑がありませぬので、唯〻項目を擧げたに過ぎませぬ。又申上げた事も甚だ迂遠な見解であり、且又斯の如き事を申上げるは釋迦に說法をして居るやうな嫌ひがあるのであります。併しながら此銀行集會所から、私に物價問題に就てお話をせよと云ふ御註文がありましたので、目下の問題として可なり重要なる事であると思ひまするので、自分の乏しい所の考に依りまして、多少外國の此の問題に關係して居りまして、「オーソリティー」になつて居る者の書物などを見ましたり、或は事柄等を調査致しまして、その一斑を申上げた次第であります。今日申上げました事は是は私の考でありますから、當つて居るか居ないか分りませぬ。併しながら前三回に御話ししました事は、是も私の考が好い加減入つて居るに相違ありませぬが、主なる事は斯の如き方面の學者の議論を自分の了解した所に隨つて申上げた次第であります。甚だ抽象的になり、煩簡宜しきを得ないことは勿論でありまするし又申上げ方が甚だ拙いので御了解になることが出來たかどうか、又私も自分の考へて居る事を充分に傳へることが出來たかどうか分り兼ねますが、前後四回に亙つて御辛抱下さいましてお聽き下すつたことを甚だ光榮とし、深く御禮を申上ぐる次第であります。是で終りと致します。」

物價問題に就て 終

大正十四年三月二十七日印刷
大正十四年三月三十日發行

定價金壹圓貳拾錢

編纂兼發行者　東京市麹町區永樂町二丁目五番地　江口百太郎

印刷者　東京市京橋區南水谷町七番地　山本周平

印刷所　東京市京橋區南水谷町七番地　日進舍

發行所　東京市麹町區永樂町二丁目五番地　東京銀行集會所

不許複製

東京帝國大學教授 法學博士 山崎覺次郎先生講述 （好評參版）

銀行叢書 第一編

紙幣概論

◆菊判全一册 紙數百四十頁 ◆定價金壹圓 ◆送料市內六錢 內地十二錢 臺樺滿鮮四十五錢◆

當所は曩に社員銀行の行員に對し、斯業の研究に資する爲め經濟文庫を開放し、圖書閲覽の便宜を圖ると共に、毎年二回著名の學者を招聘して講演會を開催することとし、去る大正十一年十月其第一回を開き翌年五月其第二回を催したり、本書は卽ち其第一回講演の速記にして、紙幣の意義より其起原及沿革を叙し、次で紙幣の價値兌換紙幣及不換紙幣を論じ、進んで歐洲大戰前後の世界諸國紙幣制度の變動、及其整理に至るまで、十一章に亘りて詳說せられたるものなり、今日歐洲諸國幣制の紊亂せる間に處して、銀行殊に爲替業務に從事せらるゝ士は勿論、其他一般に紙幣問題を研究せんとする人々にとりては、良好の參考書たるべし、敢て江湖に推奬す……

△目 次▽

一、緒言
二、紙幣の意義及種類
三、兌換紙幣
四、不換紙幣の出現と其原因
五、不換紙幣の價値に關する從來の說明
六、不換紙幣の價値の成立
七、不換紙幣の價値の變動
八、不換紙幣の對外價値
九、不換紙幣の顯著なる實例
一〇、歐洲諸國現今の不換紙幣
一一、不換紙幣の整理

◆發行所 東京 丸之內
電話牛込三九四二番
振替東京一〇〇〇番
東京銀行集會所

慶應義塾大學教授 法學博士 堀江歸一先生講述 （好評參版）

銀行叢書 第二編

金融及金融機關

◆菊判一册紙數約二百五十頁◆定價一册金壹圓五拾錢◆送料市內六錢地方十二錢臺樺滿鮮四十五錢◆

本書は當所に於ける第二回講演の速記にして博士が其該博なる蘊蓄と、犀利なる批評眼とを以て、我邦現下の金融狀態と銀行業とを觀察批判し、之が匡正策に就て詳論せられたるものにして、所說廣汎結論明確、苟くも金融及商工業に從事するの士は勿論、政治家及學生諸君の參考書として、將た財政及金融時事を論說研究する人々にとりての好資料たるべし、其目次概要左の如し……

第一章 恐慌
○大正九年春の恐慌
○恐慌に關する三種の學說
○景氣恢復と上記三說に於ける共通點
第二章 金利
○日本に於て金利の高き理由
○貨幣價値の騰落と金利との關係
○金利と物價との關係
第三章 物價
○我國の物價に就て
○アブセンテイズムに就て
○物價と國費との關係
○英米兩國の政費節約法
○節約運動は物價問題の根本的解決法に非ず
○金の禁輸問題
○同業組合法の運用
第四章 公債
○公債政策の行詰り
○減債基金問題
第五章 銀行
○不景氣時代の銀行業
○兼營銀行制度の問題
○機關銀行の弊
○銀行合併問題
○日本銀行に關する諸問題
○恐慌と金利政策
○日本銀行制度改革論
○特別銀行問題
第六章 世界大戰と財政
○世界大戰と經濟との關係
○戰時財政に於ける租稅と公債との地位
○國債整理に關する問題
○獨逸の償金問題解決
○英國戰後の經濟

◆發行所 東京 丸之內
電話牛込三九四二番
振替東京一〇〇〇番
東京銀行集會所

508
30

終